

第2章

日本青年海外派遣

第1節 エストニア共和国派遣

行動地図

行動記録

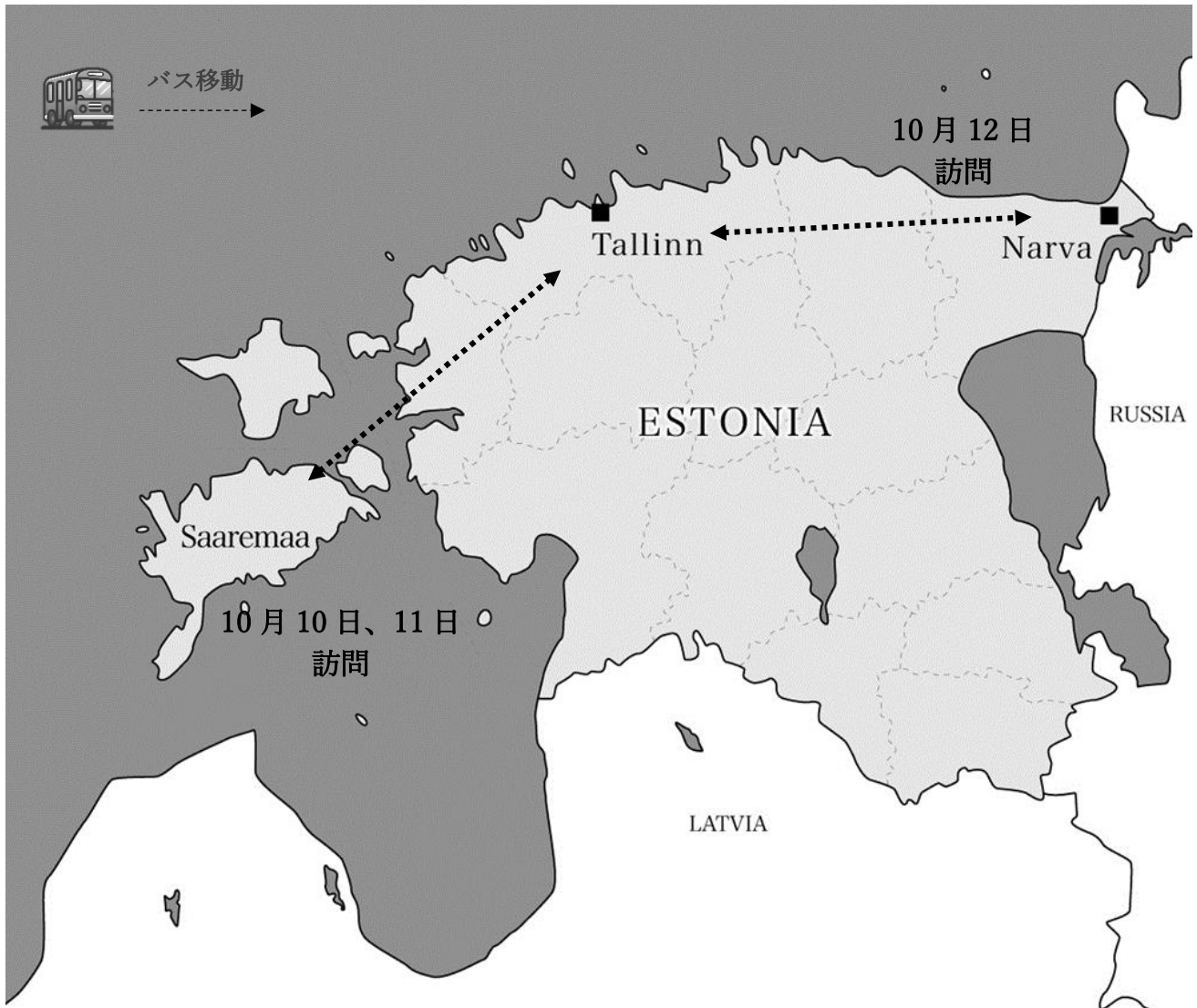
訪問先一覧

団長報告

参加青年代表報告

ディスカッション成果

エストニア共和国派遣 行動地図



エストニア共和国



エストニア共和国派遣 行動記録

月日	時間	内容	滞在都市
10月6日 (金)	23:05	東京(成田)発 (AY074)	成田
10月7日 (土)	5:55 7:30 8:00 8:45 9:45 10:30 - 12:00 12:00 - 13:00 13:00 - 15:00 15:30 18:00	ヘルシンキ着 ヘルシンキ発 (AY1011) タリン着 ホテルへ移動 朝食 オリエンテーション ホテル周辺散策～旧市街へ移動 昼食(旧市街にて昼食) エストニア旧市街散策ツアー ホテルチェックイン 夕食	↓ タリン
10月8日 (日)	9:15 - 10:00 10:00 - 11:30 11:30 - 12:15 13:00 - 17:00 18:00	移動 クム美術館見学 昼食 ウレミステにてエストニア INDEX 参加青年 及び既参加青年との交流会 E-Estonia についての説明 夕食	
10月9日 (月)	9:15 - 10:00 10:00 - 11:30 11:30 - 12:30 13:00 - 14:30 15:30 - 17:00 18:00	移動 エストニア共和国教育・青少年委員会訪問 昼食 イノベーション・ビジネスセンター メクトリー (Mektory) 訪問 施設見学ツアー ヴィヴィ・ストップ (Vivistop) 施設見学 夕食 ホテルへ移動	
10月10日 (火)	7:00 7:00 - 12:05 12:05 - 13:15 13:15 - 16:00	チェックアウト 移動 昼食 国立中等教育機関 (Saaremaa Gymnasium) 訪問、施設見学 ディスカッション(テーマ: IT x 教育)、 ワークショップ	↓ サーレマー ↓

月日	時間	内容	滞在都市
10月10日 (火)	17:30 - 19:30 19:30	ホストファミリーとの交流、夕食 ホームステイ	サーレマー
10月11日 (水)	8:00 - 8:20 8:30 - 9:45 10:00 - 11:30 11:30 - 12:30 18:00 18:30	朝食 (ホームステイ先の家庭の朝食) ホームステイ終了、Saaremaa Gymnasium に集合 クレッサーレ大学訪問 クレッサーレ旧市街散策 昼食 ホテルチェックイン 夕食	↓ タリン
10月12日 (木)	8:00 - 10:15 10:15 - 14:30 15:15 - 16:30 16:30 18:00 19:00 - 21:30	移動 インターナショナルコーディングスクール コード/ユフィ (kood/Jõhvi) 訪問 施設見学、意見交換会、交流会 移動 ナルヴァ・タルトゥ大学 (Narva Collage) 訪問 ナルヴァ散策 夕食 ホテルへ移動	
10月13日 (金)	10:00 - 11:00 12:00 - 13:00 13:00 18:00 21:00	在エストニア日本国大使館表敬訪問 昼食 自由時間 夕食 (エストニア参加青年及び既参加青年との 交流会、意見交換会) ホテルへ移動	
10月14日 (土)	9:00 - 11:00 11:30 - 12:30 13:00 - 13:20 15:15 15:50 17:45	自主研修 (チェックアウト後) 昼食 空港へ移動 タリン発 (AY1020) ヘルシンキ着 ヘルシンキ発 (AY073)	↓ 機内泊
10月15日 (日)	13:05	東京 (成田) 着	成田

Itinerary in Estonia

Date	Time	Activities	City
Oct.6 (Fri)	23:05	Departure from Tokyo(Narita)(AY074)	Tokyo ↓
Oct.7 (Sat)	5:55 7:30 8:00 8:45 9:45 10:30 - 12:00 12:00 - 13:00 13:00 - 15:00 15:30 18:00	Arrival in Helsinki Departure from Helsinki (Finland)(AY1011) Arrival in Tallin Breakfast at hotel Introduction and Welcome Walking tour at Rotermann Quarter and City center, to the old town Lunch Old town tour Check-in Dinner	Tallin ↓
Oct.8 (Sun)	10:00 - 11:30 11:30 - 12:15 13:00 - 17:00 18:00	Kumu Art Museum Lunch Cultural exchange meeting in Ülemiste City Meeting locals and organizations connected to Japan and overview about E-Estonia solutions Dinner	
Oct.9 (Mon)	10:00 - 11:30 11:30 - 12:30 13:00 - 14:30 15:30 - 17:00 18:00	Education and Youth Board Lunch Mektory; facility visit related to the regional theme ViviStop Dinner Transport	
Oct.10 (Tue)	7:00 7:00 - 12:05 12:05 - 13:15 13:15 - 16:00 17:30 - 19:30 19:30	Check out for 1 night Transport to Saaremaa Gymnasium Lunch at Saaremaa Gymnasium Visiting Saaremaa Gymnasium Discussion; Workshops with students Dinner and exchange event with host families Homestay	Saaremaa ↓

Date	Time	Activities	City
Oct.11 (Wed)	8:00 - 8:20	Breakfast	Saaremaa ↓ Tallin
	8:30 - 9:45	End of homestay, meet at Saaremaa Gymnasium	
	10:00 - 11:30	Kuressaare College	
	11:30 - 12:30	Visiting Kuressaare old town and castle	
	18:00	Lunch	
	18:30	Hotel check-in Dinner	
Oct.12 (Thu)	10:15 - 14:30	Facility visit related to the regional theme; kood/Jõhvi	
	15:15 - 16:30	University of Tartu Narva College	
	16:30	Narva promenade and old town	
	18:00	Dinner	
	19:00 - 21:30	Transport	
Oct.13 (Fri)	10:00 - 11:00	Courtesy call on Embassy of Japan in Estonia	
	12:00 - 13:00	Lunch	
	18:00	Dinner and evening program	
	21:00	public transport to hotel	
Oct.14 (Sat)	9:00 - 11:00	self-study	↓
	11:30 - 12:30	check out, Lunch	
	13:00 - 13:20	Transport to Airport	
	15:15	Departure from Tallin (AY1020)	
	15:50	Arrival in Helsinki	
	17:45	Departure from Helsinki (Finland)(AY073)	
Oct.15 (Sun)	13:05	Arrival in Narita (Tokyo)	Tokyo

エストニア共和国派遣 訪問先一覧

訪問日 10月9日

訪問先	エストニア教育・青少年委員会 (Education and Youth Board of Estonia)
訪問先都市	タリン
面会者	Kai Koort 氏 – Project Manager at Education Estonia
訪問概要	エストニア教育・青少年委員会は、エストニアの教育と青少年政策を扱う政府機関である。この機関は、エストニアの国民に質の高い教育を平等にアクセスできるようにすることを目的とし、2020年に設立された。本研修では、エストニアの教育の歴史・教育政策・学校制度などについて講義を受け、エストニアの教育について包括的な理解を深めることができた。特に、エストニアは人口が少なく、慢性的な人材不足であることから国民の教育への関心は高く、学習者への支援が充実している印象を受けた。講義後は、昼食を共にしながら各個人の興味に合わせた質問が活発に飛び交い、充実した時間となった。

訪問先	イノベーション・ビジネスセンター (Mektory)
訪問先都市	タリン
面会者	Anna Grund 氏 – Master grade student , Tour guide of Mektory
訪問概要	タリン工科大学の産学連携のインキュベーション施設である Mektory (Modern Estonian Knowledge Transfer Organization for You) の施設の説明を伺った。サムスンなどの民間企業のスポンサールームや、日本や中国などのテーマの部屋、ベンチレーションにフォーカスした部屋など様々なインスピレーションに富む施設であった。印象的であったのは、地下にはサウナも併設されていた点であった。また、世界中からの訪問者が多く、訪問者の国を示した地図がシールやサインで埋め尽くされており、この施設の世界からの注目度を肌で感じた。

訪問先	タリン工科大学 (Tallinn University of Technology)
訪問先都市	タリン
面会者	Teodor Undrits 氏 – Leader of science club、CHRO at Ray Foil
訪問概要	タリン工科大学初のスタートアップである Ray Foil 社に関する説明を伺った。他社より軽いことが売りのサーフボードを作成しているスタートアップであり、実際のサーフボードも見せてもらった。IT 起業が多いと伺っていたが、サーフボードといったハードのものづくりからの起業ということで産学連携施設ならではの感じた。

訪問先	ヴィヴィ・ストップ (Vivistop)
訪問先都市	タリン
面会者	Kaidi Marii Kütt 氏 – Designer and Mentor Jegor Mljavov 氏 – Engineer-Material Scientist
訪問概要	VIVITA (Visistop を運営している組織) は、小中高生を対象とした STEAM 教育を実践する施設である。本部はタリンにあり、日本をはじめ世界 7 カ国に展開している。今回の訪問では、施設見学とロボットプログラミング体験を実施した。施設内には、3D プリンターをはじめ、キッチン・旋盤・PC など様々な道具が用意されており、子どもの興味に合わせて自由に創造できる空間になっていた。ロボットプログラミング体験では、実際に使われている教材を基にノーコードでロジックを作り、プロトタイプを作成する一連の流れをおこなった。実際に考えるだけでなく、実践できる環境は教育機関として大変恵まれており、日本においても普及を願うばかりである。

訪問日 10 月 10 日

訪問先	サーレマー高校 (Saaremaa Gümnaasium / Saaremaa Upper Secondary School)
訪問先都市	クレッサーレ
面会者	Ivo Visak 氏 – Principal
訪問概要	サーレマー高校は、サーレマー島に位置する高校で 2021 年 9 月に開校した。75 分授業を実施し、66%の必須科目と 34%の選択科目からなる。校長の Mr. Ivo Visak は、教員だけでなくデザインエージェンシーなど他業種で働いた経験を持ち、一般公募で当学校の校長になったそうだ。今回の訪問では、授業での高校生との討論・授業見学・校内見学を実施した。授業では、グループ毎に与えられた問いに対して討論し、両国の立場の違いを認識できた。授業見学では、英語の授業にお邪魔し、高校生が英語でエッセイを書いている様子を視察した。その授業では、ノートパソコンでアプリを使用し、生徒が個別にエッセイを仕上げ、完成したら退出という各個人のペースに合わせた形態で行われていた。この点は日本の今後に大いに参考になるものではないかという印象を受けた。

訪問日 10月11日

訪問先	タリン工科大学クレッサーレ校(Tallinn University of Technology Kuressaare College)
訪問先都市	クレッサーレ
面会者	Villu Vatsfeld 氏 – Project Manager
訪問概要	タリン工科大学の主要な研究分野である海洋工学に関するお話を伺った。クレッサーレはバルト海に面した島の都市であり、海洋貿易や造船が主要な産業であり、こういった文化背景から海洋工学への研究が進んでいるということを理解できた。珍しい点としては人工的な波を起こせる施設等もあり、実践的な教育が進んでいる施設であるという印象を持った。

訪問日 10月12日

訪問先	インターナショナルコーディングスクール (kood/Jõhvi)
訪問先都市	ナルヴァ
面会者	Kadi Laats 氏 – Community Manager
訪問概要	kood/Jõhvi は、プログラミングを中心に学習する専門学校である。この学校は、IT 関連の人材不足を理由に民間と政府が共同して支援し、設立された。授業の開講言語は、英語を基本としている。特筆すべき点として、教師やクラスがないほか、授業料がかからないことが挙げられる。今回の訪問では、施設見学・学生との討論・プログラミング体験を実施した。学生との討論では、両国の IT 技術について共有し、双方の利点・問題点について話し合った。プログラミング体験では、実際に使用している教材を基にどのような形式で学習を進めているのかを体感した。教材の中には、細かくマイルストーンが設定されており自分の現在地が一目でわかるようになっており、モチベーションの維持に有効であると感じた。個別最適な教育の事例として大変勉強になる時間となった。

訪問先	タルトゥ大学ナルヴァ校 (University of Tartu Narva College)
訪問先都市	ナルヴァ
面会者	Anzelika Pratkunas 氏 – Program Manager
訪問概要	タルトゥ大学は、エストニアで最も歴史ある大学であり、1919 年に開校された。今回の訪問では、プロジェクトマネージャーの Ms. Anzelika Pratkunas より校内見学・学校のカリキュラムについて説明をしていただいた。キャンパスは第二次世界大戦で多くが破壊されたため、新しい印象を受けた。カリキュラムについては、IT に関連する学部について説明を受けた。当大学では、学士は、3 年間で取得することが出来る。また授業の開校形態についても 1 年次はナルヴァで過ごすものの、オンラインと対面を選択することができ、生徒のニーズに合わせて柔軟に対応できるそうだ。国境付近に位置しているこの大学では、図書館からロシアとの境界線となっている河川を見ることが出来た。現在の情勢とは異なり、穏やかに時間が過ぎていく様子が印象的だった。

訪問日 10 月 13 日

訪問先	在エストニア日本国大使館 (Embassy of Japan in Estonia)
訪問先都市	タリン
面会者	松村之彦特命全権大使
訪問概要	在エストニア日本国大使館にて、松村特命全権大使に表敬訪問を行った。大使からはエストニア全般に関するご説明を伺い、本プログラムでの学びを振り返ることができた。エストニアの概要、指標、歴史、政治体制、外交・国防、経済、日本との関係についてお話を伺った。電子国家や IT 活用という点では、日本と比較した場合に、国の規模も小さく、ゼロベースからの国作りができた点が成功要素として大きかったと理解した。また、挑戦を恐れない文化もエストニアにはあり、その結果数多くのユニコーンスタートアップが誕生しているという点も理解できた。

エストニア共和国派遣 団長報告

e-エストニアに未来を見に行く

村上 むつ子

<はじめに>

本年度、内閣府国際社会青年育成事業の青年海外派遣事業の日本青年の派遣が4年ぶりに再開した。エストニア共和国が本年度の派遣国の一つとなり、同国への派遣テーマは「ITの活用」とされた。

エストニアはヨーロッパの北欧諸国の南に位置するバルト海東岸のバルト3国の一つである。国土は九州よりやや大きく、人口は約130万人という小国である。資源に乏しく、力のある製造業もなく、大国に囲まれている。が、今日、同国は世界の中でもトップと見なされる「IT大国」、「デジタル最進国」であり、世界中から視察団が押し寄せている。

エストニアはどのような国で、一体どのようにして今日の姿になったのか。

私たちエストニア団員はまず、都内での事前研修や出発直前の成田のホテルでの研修を通して、徐々に同国について理解を深めていった。

エストニアは地政学的にバルト海地域の要衝で12世紀から周辺の大国であるドイツや北欧、ロシアから侵略を受け、占領されてきた歴史がある。1944年にソ連に再度占領されて多くの国民が処刑や流刑にあい、その後もソ連の厳しい支配下で抑圧された生活が続いた。1991年に独立すると、エストニアはITを利用しての行政や社会のデジタル化を進めて国作りをすることに邁進した。今日、同国は欧州連合(EU)の中でもインターネット展開、DX(デジタル・トランスフォーメーション)ではトップ、また人権、教育などの項目で

も上位ランクに立つようになった。

今回、エストニアへの派遣事業に参加した日本青年は10名(男女それぞれ5名)で、エストニアのIT事情に関心のある大学生とすでにITに関係する分野に従事している社会人であった。そこに、団長、副団長、渉外担当スタッフが加わり、合計13名で団を構成した。全員、エストニア訪問は初めてだったが、事前研修で共に学び、徐々に一つの団としての一体感を育んだ。また、青年たちは一人一人、自らの思いや目標、意欲を語り合い、自分たち自身の共通目標として、「ITを活用し、世界で多彩に活躍できるリーダー集団になる」と決意した。そして、予定通りに10月6日に「未来を見に行く」ために「e-エストニア」向けて出発したのである。

1. 首都タリンに到着

私たちはヘルシンキ経由でエストニアの首都タリンに10月7日の早朝5時頃に着いた。通訳兼コーディネーターのエリさん(Ms. Elli Feldberg)に迎えられ、その日は世界遺産に認定されているタリン旧市街に案内された。タリンは初冬の寒さで風も強かったが、中世の面影をそのまま残した美しい市街の散策を楽しむことができた。

2. 派遣活動開始、教育・青少年委員会を訪問

翌2日目は訪問予定であった野外博物館が暴風雨により閉鎖されたため、午前は代わりにクム美術館(Kumu Museum)を訪れた。ここは北欧地

域最大の美術館で、建物や内装が現代的で洗練されている。近代以前の第一次産業や庶民の生活を描いた作品、またエストニアの社会背景、社会の動静や庶民感情を追憶している作品が歴史を描きだしているのが印象的だった。

午後はエストニア教育省・青少年委員 (Education and Youth Board of Estonia=エストニアの教育・青少年プログラムの広報機関) を訪問し、担当のクリスさん (Ms. Kristina Valk) や本年度招聘プログラム参加予定のエストニア青年 3 名、昨年の参加者、日本語の先生や学生などに暖かく迎えられた。

ここではまず、日本青年が日本紹介のプレゼンテーションを行い、そろいの法被を身につけてソーラン節の踊りを披露した。また、日本人独特の習慣や仕草などについて楽しく解説をして喜ばれた。エストニア青年たちも民族ダンスを披露し、同国の歴史や社会について説明をしてくれた。

その後、エリさんとエストニア在住 10 年になる矢野翔氏が現地生活者の視点でエストニアの DX 事情や電子政府について話してくれた。矢野氏はタリン大学の大学院でサイバーセキュリティを学び、現在はタリンで配送ロボット技術の仕事についている日本人である。

お二人によるとエストニア国民は全員が電子身分証 (e-ID) を持っており、それをお金の移動や契約時の署名代わりに使う。国民は IT リタラナーが高く、個人データは自分でパスワードや暗証番号でアクセスして自ら管理し、選挙でも電子投票をする。役所などの行政手続きやサービスはほぼ全てオンラインで行える。

エストニアでは 1990 年代に全国にインターネットが整備され、教育分野の手続き、図書館や学校との連絡、行政手続き等が徐々にオンラインでできるようになった。発展のベースとなったのは「e-ID」の広がり、2001 年に官民をつなぐデータ交換基盤が整備された事だと見られている。

3. 教育が e-エストニアの要、支えるのは多様な教育支援

10月9日にはエストニア教育省・青少年委員会でプロジェクトマネージャーのクートさん (Ms. Kai Koort) がエストニアの教育について説明してくれた。エストニアは 2006 年から教育改革に着手、その結果、教育成果が劇的に向上し、2018 年の OECD の PISA 調査ではエストニアがヨーロッパで 1 位、世界で 4 位になった。

同国では各校が自由に授業内容を自由に決める裁量範囲が広い、現場での創意工夫が活発で、学業に必要なツールは政府が提供している。子どもは幼稚園で IT に遊び感覚で触れ、低年齢からコーディング (プログラミング言語を使ってソースコードを作成すること) を学ぶという。

電子大国となった e-エストニアの発展は未来の人材の教育にかかっているという社会通念が広く共有されており、官民の IT 人材が共に教育現場で協力している事がレクチャーを通して実感できた。

4. メクトリーとヴィヴィストップ

午後にまず訪れたのはメクトリー (Mektory = Modern Estonian Knowledge Transfer Organization for You) という施設である。ここでは官学民が共同して知識や情報を若者たちに広く伝えている。そのために 6 歳から 18 歳の青少年にテクノロジー教育や起業の支援プログラムを提供している。

館内にはスポンサー企業や大学、日本、中国、アメリカなどの国が提供している大小の部屋、そして xR (クロスリアリティ) のような特殊装置を備えた部屋もあり、施設利用者はすべて自由に使える。ここではまた大学とスタートアップ企業が組んで共同で新製品開発や起業の支援も行っている。

次に訪問した「ヴィヴィ・ストップ (Vivistop)」は大きなスタジオのような施設で、市内の工場跡地を再開発したテリスキピという人気地域にある。ヴィヴィタ (VIVITA) という組織が運営し、9歳から18歳までの子どもや青年が作りたいものを作り、挑戦したいことに取り組めるスペースになっている。工作材料や木工道具から3Dプリンターやレーザーカッターなどの高度な機械も取り揃えてあり、必要に応じてスタッフが手助けをする。プラスチック粉碎破片を材料にして作った小物類、手作りのレコードプレーヤー、鳥の形の大きなインストレーションなど、ここで製作した作品も館内に溢れている。

ここでは日本青年もモジュールを組み合わせてプロトタイプを作り、簡単なプログラミング作りを体験させてもらった。彼らは試行錯誤しながらも楽しく作業し、数人ごとにプロトタイプを完成し、成果を見せ合った。子どもでも大人でも、自らの自由な発想で創造的に物作りに取り組む力や喜びがあることを間近に感じられた時間であった。

5. 革新的な高校で学生と交流、ホームステイを体験

エストニア滞在4日目にはタリンからバスで4時間ほど南西に移動、フェリーでバルト海に浮かぶサーレマー島に到着し、島内のクレサーレ市にあるサーレマー国立高等学校 (Saaremaa Gymnasium/Saaremaa Upper Secondary School) を訪問した。同校は2年前に開校して以来、国内でも革新的な公立高校として知られ、現在、508名の生徒が在籍している。

迎えてくれたのは若いヴィサク校長 (Mr. Ivo Visak) だ。彼もまたエストニアの高校の学習科目の66%は教育省が定める必修科目だが、他は各校の方針で自由に組み立てられると説明してくれた。サーレマー高校では独自に15科目を設置したが、座学だけでなくコミュニティワーク、「サ

ーレマー住民」という地域学、またNGOを学ぶコースなど、多彩な科目が提供されている。

私たちは同校で英語の授業を見学した。高校生はケンブリッジ英語検定テスト準備のために各々、オンラインで該当サイトに入り、AIが作った「新しい仕事」という題の文書に自分で手を入れて書き直す作業をしていた。

その後、日本青年は同校の高校生とグループに分かれ、「お金」「戦争」「環境」「テクノロジー」について自国の現状を語り、共通点や解決策などについて活発に議論をした。

夕刻には日本青年たちはホームステイの受け入家庭の7家族の方々と合流し、各家庭に向かった。彼らはそれぞれ事前に準備をし、子どものいる家庭に行く青年は日本のおもちゃや菓子を用意していた。また、ホームステイ家族に日本を紹介するため、抹茶をたて、和菓子を味わってもらった青年もいた。翌朝、青年たちは意気揚々と戻ってきて、各ホストファミリーに暖かくもてなしていただいたとの報告が相次いだ。

6. タリン工科大学クレッサーレ校を訪問

ホームステイの翌日は、市内のタリン工科大学クレッサーレ校 (Tallinn University of Technology Kuressaare College) を視察した。ここは名門タリン工科大学のカレッジで、造船、海洋工学、転じてブルー・エコノミー(海洋経済)などを専門とする大学である。

この地域はバイキングの時代から造船技術に優れ、18世紀から長さ30メートルに及ぶ大型船を建造してきたという。同大学は1999年に設立されたが、今日、船はコンピュータで設計、モデル船には「人工知能キャプテン」を搭載するなど、授業や研究に現代最新技術を取り込んでいる。同大学は大都市の大学とは異なり、地域の特性や文化と歴史的に強く繋がっていること、またその重要性を観察できた。

7. 国際コーディングスクールとタルトゥ大学ナルヴァ校を訪問

サーレマー島から戻った翌日、10月12日には私たちは東へ150キロほど離れたユーフィ市(Jõhvi)にバスで向かい、国際コーディング・スクール(kood/Jõhvi)を訪ねた。

ここは大手IT会社のリーダー8人が民間企業や政府と共に3年前に開校した学校で、18歳以上の青年たちに2年間、無料でコーディングを教えている。「パートナー」企業は30社ほどあり、社員を先生役として送り、ワークショップやレクチャーを主催するなど精力的に後押しをしている。

ここでも日本青年は同校の学生とグループに分かれ、「成功したITイニシアティブの事例」を各人が付箋紙に書き出し、「それらの共通点」を整理して分類、それぞれの国で「ITソリューションを展開するための課題」などを話しあった。

午後はバスでさらに80キロ離れたナルヴァ市にあるタルトゥ大学ナルヴァ校(University of Tartu Narva College)に向かった。同市はエストニアの東端に位置し、ナルヴァ川を隔ててロシアに接している。同市の住民の80%はロシア系エストニア人でロシア語を話し、ロシアの伝統的な生活風習を守っている。

タルトゥ大学ナルヴァ校は名門タルトゥ大学のカレッジとして25年前に設立され、現在100名ほどの学生がITの実習科目や、ソフトウェア開発、また、エンジニアリングやビッグデータなどを学んでいる。

大学見学の後、ナルヴァ川沿いにある公園で散歩する機会があった。木々の葉は色づき、平和な風景が広がっていたが、川沿いの展望台から川を眺めると大きな橋が対岸のロシアに通じており、トラックが数台見える。2022年2月にロシアによるウクライナへの軍事侵攻が始まる前は日常的に両岸からの往来があったが、今では厳しい検閲があり、許可された車両のみが通行を許されている

とのことだ。

エストニアは現在、NATO(北大西洋条約機構)の一員で、歴史的体験からカ国民心理としてはロシアへの警戒感が強いことを複数の訪問先で見聞きしていたところだ。

8. 在エストニア日本国大使館を表敬訪問

タリン滞在最終日の10月13日には在エストニア日本国大使館を表敬訪問し、松村之彦特命全権大使の丁寧なおもてなしを受けた。

大使によると、エストニアは1991年の独立時に何もなかった状態から再出発し、行政と民間が一体になってDXを推し進め、今日の発展につながった。2002年にe-IDを強制的に導入したが、データへのアクセスはすべて本人が追跡をできるため、国民には自分のデータは安全に守れるという安心感があり、その利便性を受け入れたのだという。

また、エストニアは国民による起業を効率的に促し、成功者が政府や大学と共に新たな起業を強力に支援するエコシステムが構築され、ITなどイノベーション産業の育成に国を挙げて取り組んできている。同国のスタートアップはスカイプをはじめ1500社ほどあり、今まで10社のユニコーン起業(評価額が10億米ドルを超える未上場のスタートアップ企業)が誕生しているという。

同日夕刻には私たちは再びヴィヴィ・ストップに立ち寄り、エストニア青年らと共に夕食をとりながら親しく交流をした。互いの国の文化紹介をして、素晴らしい踊りを見せ合い、楽しいひと時でエストニア滞在の最終日を締めくくった。

そして、翌日は10日間のエストニア訪問を終えてタリンを出発し、予定通りに10月15日に日本に帰国した。

<おわりに>

今回のエストニア派遣を振り返ると、参加青年たちは現地での活動や体験を通して確実に成果を得たという印象がある。エストニアの歴史や豊かな文化や社会について理解を深め、同国の IT 活用の実態や仕組みについて学べただけではない。エストニアの方々の生の声を聞きながら同国の現実を肌で感じていた。また、同世代の若者とコミュニケーションをとる中でさらに自分たちの見識を醸成し、自らの成長に、また日本社会につなげて行こうとする強い意欲を持ったようだ。青年たちの IT への関心のベクトルはそれぞれ異なっていたが、事前にそれぞれの参加動機や目標、思いを言語化してお互いの関心を理解した。そしてエストニアでは 1 つのチームとして行動を共にする中で、違いを乗り越えて力をつけて行ったのだと思う。

最後にエストニア団で団長を務めさせていただいた私自身にとっても今回の体験が新しい学びや望外の充実感をもたらしてくれた事を報告し、感謝したい。それを可能にしてくれた 10 人の青年たち、青年に親身に寄り添ってくれた副団長の有江幸司氏はじめ、渉外役で同行してくれた山田太地氏、内閣府の皆様、エストニア国内で対応してくださった現地の方々、そして事業運営全般に携わった方々へお礼を申し上げる。

私もエストニアについて青年と共に学び、e-エストニアの最前線の実態を知り、総じて、今日の世界の現実や時代をあらためて認識する機会となった。エンパワーした 10 人の青年たち一人一人の笑顔を中心に思い浮かべると、これからグローバル化する世界や日本社会に意欲的に関わり、貢献していく彼らの姿が見えるようだ。この素晴らしい国際社会青年育成事業がこれからも発展し続けることを願ってやまない。

エストニア共和国派遣 参加青年代表報告

人生の価値観を大きく変えた出会いと時間

三浦 友希衣

志望動機と事前研修で掲げた目標

社会人として仕事をする上で「自分の強みはなんだろう」「今後の将来像をどのように考えればいいのか」と漠然とした悩みを抱え日々を過ごしていた。そんな時、偶然目に飛び込んできたのがこの事業の応募要項である。「内閣府」というワードにハードルの高さを感じたものの、大学時代に英語を学び、現在 IT を生業とする私にとって、自分の強みを生かしつつ、沢山の学びを得るこの上ないチャンスだと考え、何かを変えたいという勢いだけを頼りに応募を決意した。

不安と緊張の中、いざ事前研修に臨むとメンバーのレベルの高さに圧倒され、出来ない自分に劣等感を抱いた。しかし私がすべきことは自分の能力に悩むことではなく、自身の強みを生かし周囲に貢献していくことだと気づいた。「受けた刺激を成長に繋げるためにここに来たのだ」と出来ない自分の存在も認めつつ、成長のための努力と並行し、派遣後も繋がる関係性の構築を目指したいと思うようになった。そのために率先して行ったのは、チーム内で話しやすい雰囲気を作ることだ。事前研修後、地方在住の私にとって対面で会うことは難しかったが、団で決めたオンラインの定例会には必ず参加し、離れている分、密に連絡を取るように意識した。派遣直前に、本事業のOB/OGが運営するIYEOの全国大会に出席し、世代を超えて繋がるネットワークを目の当たりにしたことも、派遣団として結束を固めたいという思いを更に強めた。加えて意識したのは、団としての連携である。団長・副団長・渉外と団員との

距離が空かない様、全員を巻き込んだ会話を心掛け、誰も取り残さない状況を作りたいと考えた。14人で1つのチームとなり、団全員が信頼のおける仲間と出会えたと胸を張れることを目標に、1人1人との対話を大切にしていくことを決めた。



日本代表としての決意を固めるエストニア団

エストニアで学んだ環境づくりと関係性

エストニアでの現地活動では、IT 大国としてどのような教育が行われているかを学んだ。一番印象的なのは主体性を育むための環境があることだ。まずは興味を持たせること、そしてトライしたいと思えば周囲のサポートを受け挑戦できる環境が素晴らしく整っていると感じた。例えば Vivistop では、8 歳の女の子がオリジナルのぬいぐるみを作成したいと、自分で描いた図を傍らにミシンを使用していたし、kood/Johvi では、先生も決められた時間割もない中、自身が得たい IT 知識を選択し、学習できる環境が提供されていた。これら施設の利用は無料であるというから更に驚いた。日本では、責任の所在に拘りすぎて、年々

自由な環境が制限されつつある。また自己責任を問われる社会人になると、時間の制限や会社への帰属意識などから自由に学べる環境へ身を置くことが難しい。実際、私自身も職場で様々な教育受講希望を打診した際、受講した事によって会社にもどのように貢献できるかを問われた経験がある。しかしながら、本人が望み目的を持って取り組むのであれば、会社にも、ひいては社会にも貢献できる能力を手に入れられるのではないだろうか。成長に向けて本当に大切なのは、意志の尊重や目的に沿った行動へのリーディングなど、各個人が主体的に動ける環境作りなのだと痛感した。また、Saaremaa Gümnaasium / Saaremaa Upper Secondary School を訪問した際には、校長先生と学生の距離の近さにも目を見張った。34 歳という若さで校長になるまでどのように過ごしてきたかを語ってくれたが、恐れ多いほど素晴らしい経歴の持ち主だった。そんな校長先生に、まるで友達のように笑顔で気軽に声をかける学生の姿を見たとき、ここでも「主人公は生徒」である環境作りが行われているのを実感すると同時に、そのような環境が「良い関係性の構築」に繋がるのだと間近で感じる事が出来た。



Vivistop でぬいぐるみを作る 8 歳の女の子

仲間と、そして自分と向き合った国際会議 & 帰国後研修

帰国後、意見の食い違いによりメンバーと衝突したことは記憶に新しい。社会人になって衝突を避けるのが良しとする暗黙の風潮に流されてきたため、夜中まで議論したのは久しぶりだった。この議論を通じて学んだのは、受け入れる素直さとその強さだ。冒頭で記述した劣等感と、人生の方向性に指針を持たない悩みをひた隠しにしたかったこの気持ちを、この議論を通じて初めて打ち明けた。聞いてくれたメンバーは少し驚いていたようだったが、受け入れた上で逆に私の強さを語ってくれた。自分でも認めたくなかった負の気持ちを、仲間がポジティブな感情に変えてくれた出来事だった。同じ志を持ってこの事業に参加し、慣れない環境で寝食を共にした仲間の言葉だからこそ受け入れられる感情だった。

次の日の国際会議では、英語でのスピードある議論が頭上を飛び交い、思うように言葉が発せない初日を過ごした。ここに至るまで約 2 週間半、楽しくも気を張っていた緊張と、意見を伝えられない自分へのもどかしさに思わず涙がこぼれた。しかし 2 日目からはその悔しさをバネに、会社での新人教育の経験と現業の IT 知識を強みに、そして仲間が変えてくれたポジティブな感情と共に、伝えたいことは最後まで伝えきることを意識し議論に参加した。思うように単語が出ない私を誰も咎めず、同じ日本人の仲間はサポートしてくれ、海外青年は想像以上にしっかり耳を傾け聞いてくれた。英語はコミュニケーションのツールでしかない。上手く話せるに越したことはないが、本来の目的は相手に伝わることだ。そのためには、伝えたいと思う意思、相手だけでなく意見がある自分の存在も尊重することが大切だと学んだ。議論が弾んだ結果、成果発表会では内容もチーム力も一番良かったとお褒めの言葉をいただいた。事前研修に目標として掲げた「自分の成長」

と「良い関係性」について大きな達成感があったことを覚えている。



EdTech について議論した国際青年交流会議

帰国後研修では、本事業へのフィードバック会に向けて団青年だけで会議を行った。組織の一員として行動する以上、不満や愚痴はつきものだが、私たちエストニア団が目指したのは、感情をぶつけるのではなく「来年以降派遣される方たちが、今年以上に良い派遣となるために経験談から語れること」の伝達だ。この会が実施される目的は何か、そのために取るべき行動は何かを青年全員で話し合い、意見を纏めるに当たって相手への敬意を忘れないことをルールとして決めた。言葉で言うのは簡単だが、議論の中では意外と難しい。現に過去に出席した会議でも、目的を見失い相手を咎めるような光景を何度も見てきた。しかしながらここでは、目的に忠実に、発言者の意見を尊重しつつ、客観的に討論していく時間となった。3時間という短い時間だったが、しっかりと纏め上げた意見とフィードバックの在り方は、ぜひとも職場で取り入れたいと思うものだった。

事業を終えた今とこれから

事業後、エストニア団の仲間から「発言しやすい雰囲気をありがとう」「知識よりも大切なものがあると気づきました」と連絡をもらった。行動で示した私からのメッセージをしっかりと受け取ってくれたことを嬉しく思うと同時に、私もみんなから数えきれないほど沢山の刺激をもらえたことに心から感謝を伝えたい。エストニア団だけでなく、ドミニカ団や海外青年との出会いをはじめ、この事業を通じて遭遇した全ての出来事が、私の人生への価値観を変えてくれた。主体性を持てる環境作りや、相手や自分が持つ意見の尊重、信頼、ありのままの自分を受け入れる強さ、伝える意思や相手への敬意など、どれも私が目指している「自分の成長」と「関係性の構築」に必要なものであり、それらを身に染みて感じる時間だった。

何気ない会話の中でデンマーク青年がギャップイヤーについて語ってくれた。ギャップイヤーとは、大学への入学前、在学中、卒業してから就職するまでの期間を利用し空白の時間を設け、自分の好きなことに時間を充てられる制度だ。そのギャップイヤーを4年間取得し、色々な国へ旅行したメンバーがいた。就職が遅れることに不安がなかったか聞いてみると、その期間で様々な経験をしたことで、改めて自分の目指す方向性が明確になったと言う。将来像を描き切れていない私にとって、強く胸に刺さる言葉だった。今回事業に参加する際も、会社を休むということについて後ろめたさもあり、参加した成果を仕事に直結させなければならないと考えていた。しかし、今いる場所だけでは見えないものがあるのも事実だ。実際、この事業を通じて得た出会いや感情は、仕事に直結させる以上に、私自身の在り方や思考の持ち方について計り知れない影響を与えてくれた。



デンマーク青年とも一緒に過ごした文化交流会

今はまだ引き続き「ありたい姿」を模索中だ。将来像を明確にしていくために色々な経験を重ねていくと同時に、コロナの影響や職場の居心地の良さから諦めていた海外への挑戦も、もう一度視野に入れてみたいと思う。そこにもし、エストニア共和国やデンマーク王国が絡む機会があれば、心の底から嬉しく感じる。キャリアを描いていく中には、飛び越えられないと感じる高い壁に遭遇することもあるだろう。しかしながら、この事業での経験や仲間たちとの思い出が、私の次なる行動を支えてくれる大きな原動力になることを確信している。そしてこれからの活動として一番伝えていきたいのが、挑戦する勇気だ。合格出来るか、会社は休めるか、批判的な意見にどう対応するか等、応募前には様々な不安が頭の中をよぎった。しかし、考えていても何も始まらない。一步踏み出す勇気が、人生を変えるきっかけになるかもしれないということを伝えていきたい。

未来の指針

吉良 慶信

本事業に参加した理由

「なぜパスポートを更新するためだけに、長時間待たないといけないのか」——この疑問を出発点に本事業に出会った。

本事業に参加する半年前、海外旅行に行くために地元の市役所でパスポート更新の手続きをしていた。その時に上記の疑問が浮かび、行政のデジタル化に興味を持つようになった。調べていくうちに、エストニアでは 99%の行政サービスがオンラインで完結するというのを知り、現地で確かめてみたいと思うようになり、最終的に本事業に出会ったのだった。ただ、最初は参加することを躊躇していたのが本音である。なぜならば、以前国際交流プログラムに参加した際に、海外青年に「なぜ私よりも恵まれた環境で育ったあなたが私よりも英語ができないのか」と言われてから、英語で議論するのが小さなトラウマになっていたからだ。しかし、この機会にトラウマを乗り越えたいと思い、参加することを決意した。

よって、私が本事業に参加した目的は2つある。1つ目は「デジタル先進国・エストニアの実態を知ること」、2つ目は「英語で自分の考えを発信できる人材になること」だった。

本レポートでは、エストニア派遣期間中どのようなことを学んだのか、海外青年と議論する中でどのような成長があったのかを共有する。

エストニア派遣期間での学び

エストニア派遣期間は1週間という短い期間だったが、現地で施設を訪問したり、話を聞いたりすることで、非常に多くのことを学んだ。以下に日本がエストニアから見習うべきだと感じたことを3つ取り上げる。

<国のブランディング>

私がエストニアで最も感心したのは国をブランディングする意識だ。エストニアは人口約130万人の小さな国である。日本の自治体でいうと埼玉県さいたま市と同じ規模だ。そのような小さな国の名前が多くの人に知られていて、デジタル先進国であるというイメージが共有されているのは驚くべきことだと考える。

エストニアのブランディングを支えているのは、国外からのリソース獲得に向けた強い意欲と、それを具現化するための組織体制だ。まず、エストニアは小さな国なので常に人手不足であることに加えて、暗黒の歴史を踏まえて自国の未来を守るためには、国外からもリソースを調達することを真剣に考えている。だから、e-Residency というデジタル国民の制度も生まれているのだ。そして、2016年から国のブランディングを担当する Brand Estonia という政府機関が立ち上がっていて、政府職員と民間のデザイナーから構成される官民一体となったチームがブランディング戦略を手がけている。実はこの組織の存在は帰国するまで気づけなかったのだ。しかし、滞在時にどの施設を訪問しても使用しているパワーポイントのデザインが同じだったことが不思議で、調べたところ

Brand Estonia という組織がブランディング戦略の一環で外部発信用のデザインテンプレートを用意していたことに気がついたのである。

地域を企業のようにブランディングして、外部の協力者を増やすことで地域の生存を守るという発想は、今後日本の地方自治体レベルで求められるのではないかと考える。

<官民連携の滑らかさ>

エストニアは官民連携が効果的に機能しているということを事前学習で学んでいたのだが、なぜ官民連携が機能しているのかは現地の人と議論をする中で気がつくことができた。

一言でまとめると「官と民の関わりが滑らかだから」だ。エストニアの官民連携の歴史は、ソ連から独立をして、急速に社会基盤を整理するためには官民間問わずに人材を共有する必然があったことから始まっている。エストニアは人口規模が小さい国なので、独立当初も人材不足に悩まされており、官民一体で社会基盤を整える必要があったのである。だから、官民連携をするのが当たり前であるという思想を感じ取った。

実際にこれから就職をするエストニア青年に Private Sector か Public Sector のどちらで働きたいかの意識調査をしたが、ほとんどの青年が両方で働きたいと述べていたことには驚いた。彼ら（彼女ら）はどちらの仕事も魅力的あるように感じていて、そもそも官か民かという分け方は重要ではないと考えているようにも思った。

官民間問わずに人材を共有するべきという思想が根底にあり、官民の人材の流動性が高く、お互いに尊重しているからこそ官民連携がしやすい社会環境なのだと考えた。官と民で人材を共有するという思想は、急速な人口減少が進んでいる日本にも必要な考え方であろう。

<若いリーダーの存在>

私がエストニアで様々な施設を訪問して衝撃を

受けたのは、施設の案内役の方々のほとんどが20代～30代だったことだ。逆に日本に海外青年を招聘した時、施設の案内人を40～50代以上が占めていたのでギャップの大きさを感じた。

特に印象に残っているのは、サーレマー島の高校を訪問した時の校長先生が34歳だったことである。その高校のほとんどの先生が校長先生よりも年上だったが、それでも彼が校長先生に選ばれていることには衝撃を受けた。幸運なことに、私は校長先生の家ホームステイをすることができたので色々話を聞くことができた。部下のほとんどが年上という環境でリーダーを務めるために心がけていることを聞いたら “You just have to stay clever” で、そのためには多くのことを勉強しなければならない、と言われたことを鮮明に覚えている。

このように、エストニアは若い国家ということもあり、高齢化率が20%を超えているにも関わらず同世代の若いリーダーが社会で活躍しているように見えた。同世代として良い刺激を受けたし、我々も年齢に関係なく周囲からリーダーと認められるように日々精進しなければならないと考えた。



サーレマー高校での集合写真
中央にいるのが34歳の校長先生

海外青年と議論を重ねる中での成長

冒頭で述べたように、当初は海外青年との議論をすることを避けたいと考えていた。発音やボキャブラリーには自信がなく、グループディスカッションに参加するのは気が重かった。

しかし、本事業に参加して多くの海外青年と議論を重ねる中であることに気づいたことから、英語での議論に自信を持てるようになった。それは「自分の考えを伝えること」が目的であり、「英語力が高いこと」は手段に過ぎないということだ。まず相手に伝えたい自分の考え・思いがあることが最も重要であり、それを誠意に伝えようとすれば、たとえ発音やボキャブラリーが下手でも、相手は理解しようとしてくれる。そのことに気がついてからは、以前のトラウマは払拭され、堂々と自分の考えを話せるようになった。

そのため、エストニア青年、デンマーク青年とプログラム時間外も含めて多くのことを議論することができて、大きな喜びを感じた。自分の考えを話せるようになることで、相手も心を開いて考えを聞かせてもらえるようになることを実感した。海外青年はそれぞれの母国へ戻ってしまったのだが、夜通し議論する中で築き上げた関係性は一生続くものだと確信している。将来、彼ら（彼女ら）と再会して議論をするのが待ち遠しい。



国際青年交流会議のグループメンバーとの写真

総括

「デジタル先進国・エストニアの実態を知ること」「英語で自分の考えを発信できる人材になること」。この2つの目的は十分に達成することができた。本事業に参加できたことを心の底から誇りに思っている。

本事業で得られた学び、経験、そして築いた人間関係を大切に、これらを自分の未来、日本の未来、世界の未来への投資として活かしていく所存である。将来のキャリアについては不透明なことが多いが、官と民の双方の世界で経験を積み重ね、最終的には官民一体で協力し課題解決に取り組むリーダーシップを発揮できるよう、日々努力していくつもりだ。

最後に、本事業のために御尽力くださった全ての方々に心から感謝申し上げたい。皆様に支えられて、本当に貴重な経験をさせていただきました。また、私が2つの目的を達成できたのは、7月の事前研修から多くの時間を共に過ごし、嬉しかったことも悩んでいることも、何でも共有できる、信頼できる団員がいたからである。団員の皆さんの存在が精神的な支柱となりました。団員の皆さんありがとうございました。

エストニア共和国派遣 ディスカッション成果

1. 10月10日開催分

場所	サーレマー市、サーレマー高校
テーマ	1. What causes more stress to young people today? 2. Internet data privacy
参加者	日本参加青年 10 名、エストニア高校生 15 名、通訳 2 名
スケジュール	12:05-13:15 昼食 13:15-14:15 分科会 14:15-17:00 高校見学

<分科会ごとの成果> グループ 1 から 4 に分かれて分科会を実施

テーマ	1. What causes more stress to young people today? 2. Internet data privacy
トピック	1. 各グループのテーマは以下の通り グループ 1 : Money グループ 2 : Technology グループ 3 : Environment グループ 4 : War 2. インターネット上データのプライバシーに関する 3 つの法律を制定 (全グループ共通)
参加者	日本参加青年 3 名、エストニア高校生 3 名

グループ1の成果

テーマ1：What causes more stress to young people today?

1. エストニア共和国での現状

エストニアの高校生は、お金に関する悩みとして主に「教育費」「関税」「アルバイト」の三つを挙げていた。彼らが「教育費」について懸念している理由は、現在エストニアでは教育が無料だが、近年エストニア政府の財政が圧迫されており、教育費を有料化する可能性が検討されているからである。現在の高校生が大学に進学する頃には、授業料が必要になるかもしれないという不安があるのだ。また、「関税」に関する悩みは、近年 EU 圏外からの輸入品に対する関税が高くなっており、特にアジア圏からの商品価格が上昇しているからだ。最後に、「アルバイト」については、高校生が住むサーレマー島には働く場所が少なく、提供される賃金も低いため、趣味に費やすお金を稼ぐ機会が限られているという問題がある。

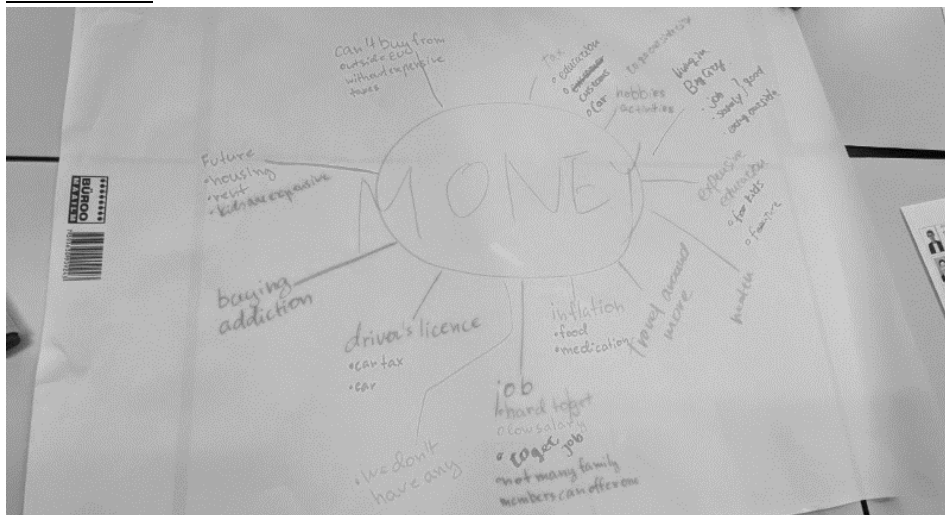
2. 日本での現状

一方、日本の青年は「インフレ」と「税金」に関する悩みを抱えている。日用品や食品の価格が高騰していることから、「インフレ」の影響を日常生活で感じており、特に海外での買い物時に物価の高騰を深刻に受け止めている。さらに、円安の影響もあり、海外での価格上昇が一層強く感じられる。また、「税金」に関しては、少子高齢化が進む日本で社会保障制度を維持するため、将来の増税が懸念されており、そのことに不安を覚えているのだ。

3. 学んだこと・気づいたこと

日本とエストニアの両国は少子高齢化と人口減少に直面しており、現在の社会システムを維持するためには財政支出の削減が求められている。これにより現役世代の負担増加が避けられない状況であり、若者がお金の問題に特に敏感になっていることが分かる。また、教育を重視するエストニアでさえ、教育費の有料化が検討されていること、そしてそれを高校生が理解し、自分の意見を述べていることには驚かされた。これは、エストニアで国の未来に関する議論が活発に行われていることを示している。

4. 発表の内容



テーマ 2 : Internet data privacy

1. エストニア共和国での現状

エストニアは EU に加盟しており、個人情報保護に対する意識が相対的に高い。特に「忘れられる権利」に関しては、国民が誇りに思っている様子が見受けられる。その一方で、個人情報を入力する際にその扱いに無頓着であることも指摘されていた。

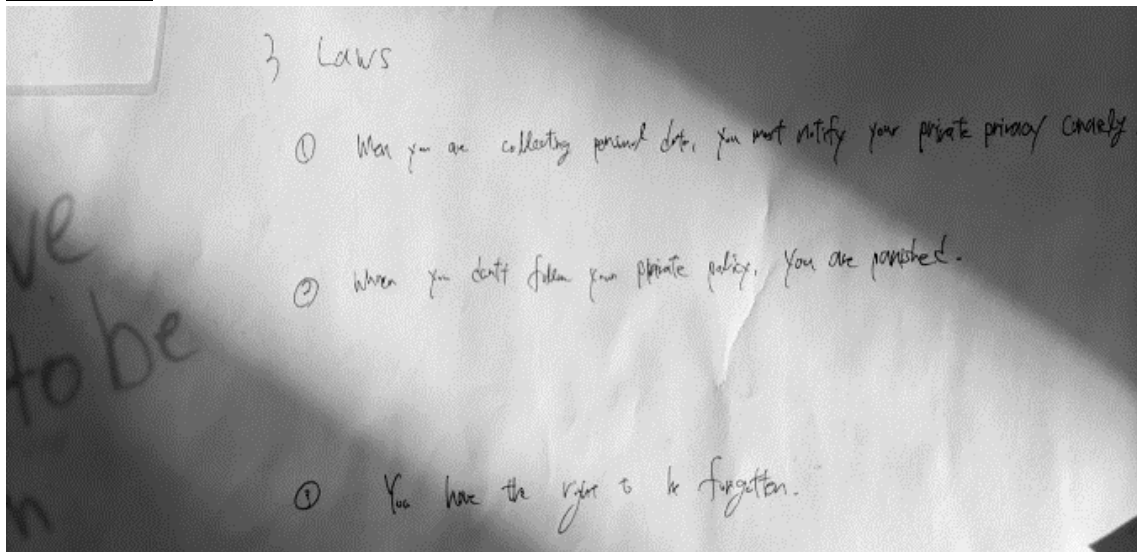
2. 日本での現状

日本にも「忘れられる権利」に類似する法律が存在するが、それを認識している人は少ない。そのため、個人情報保護に対する意識は、相対的に低いと考えられる。

3. 上記現状から学んだこと・気づいたこと

デジタル化が進む社会において、個人情報保護は非常に重要な課題だ。若者はデジタルネイティブ世代として、個人情報が収集されることに対する抵抗感が薄いことがある。しかし、個人情報が不適切に扱われるリスクも高いため、リテラシーの向上が求められる。

4. 発表の内容



<分科会ごとの感想文：グループ1>

執筆者：木村 将誉

事前学習の中ではエストニアの IT を用いた教育関連の取り組みを学んだ。1996 年のタイガリープによる全校へのコンピュータおよびネットワーク環境の整備、2002 年のイースクールによる学校の関連情報の共有の推進など、IT に関して言えば非常に先進的な取り組みをされている印象を抱いた。

1 目のディスカッションのテーマは、「What causes more stress to young people today?」というテーマだった。このディスカッションから得た学びは 2 点ある。まず、事業継続性の視点だ。エストニアは教育を重視しており、様々な取り組みを進めているため、高校生がお金に関連する懸念をそれほど抱えていないと考えていた。しかし、エストニア政府の財政事情から教育費の有料化が検討されているのが懸念であるというコメントを聞いた。先進的な取り組みや投資をしたとしても、その取り組みを継続するためには継続的な投資が可能な財務基盤を整える必要があるという点が重要だと改めて思った。次に、地域格差の問題だ。サーレマー島の地方都市にある高校の生徒は、働く場所が限られており、バイトや就職の選択肢をサーレマー島外で探さざるを得ないという現状を知った。これは日本の地方都市にも当てはまる。

2 目のディスカッションのテーマは、「Internet Data Privacy」だった。EU 一般データ保護規則（General Data Protection Regulation、GDPR）をはじめとしたデータ規制によりヨーロッパは他国と比べても個人情報の取り扱いについて関心が高いと考えていたが、実際にディスカッションの中では自らの提供した個人情報がどう使われているかに関しての関心は薄かった。これは、政府や行政サービスへの信頼度が高いがためにそうなっているのではないかと考えた。

2 つのディスカッションを通じて感じたエストニアという国への印象に関しては、若者たちが自国の立ち位置に関して高い関心を持っていると感じた。日本の高校生と比較すると、税制や情報関連の法規制に関する理解が深い。一方で、提供した個人情報の使用方法や、データ提供時の個人情報取り扱い文書への無関心は日本と同様の状況であった。

グループ 2 の成果

1. エストニア共和国での現状

- 多数の行政サービスをオンラインで提供する電子国家である
- 日常生活で PC 等の IT 機器を多用している
- インターネット環境の危険性やセキュリティについて若い頃から学ぶが、危険性を重要視せずインターネットを利用することも多い
- 高校生であっても Chat GPT を活用する

2. 日本での現状

- 特に高齢者において IT 機器を使う機会がない、適切に使えない人も多い
- インターネット環境の危険性について学んでいない世代も多く、セキュリティに対する知識が少ない
- よく使う IT ツールは翻訳ツールである

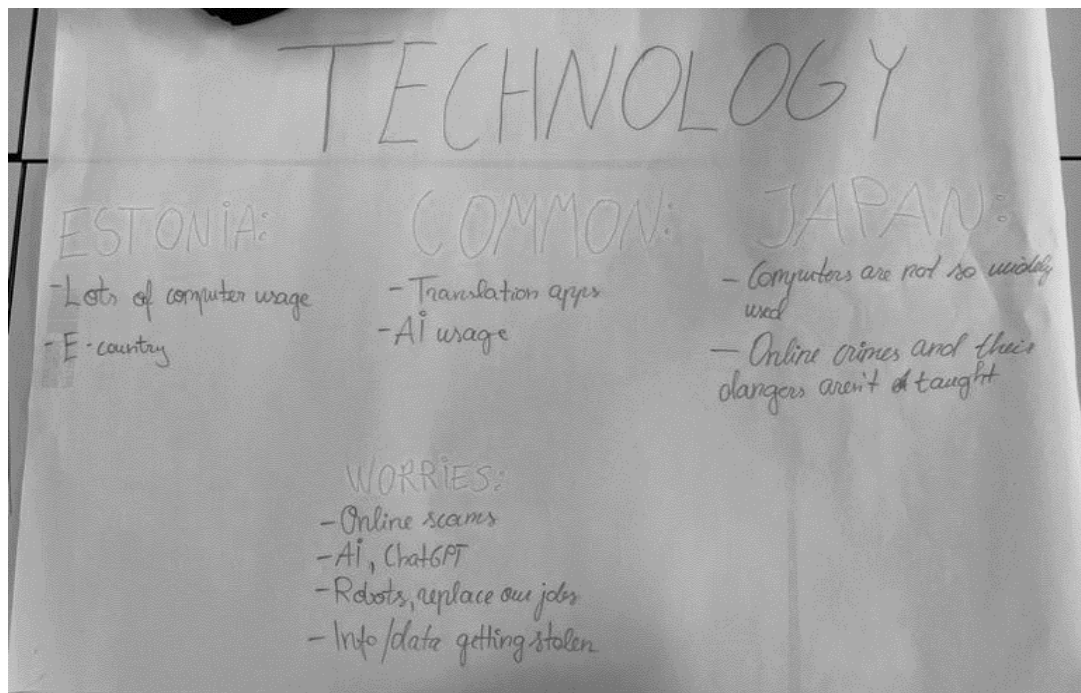
3. 上記現状から学んだこと・気づいたこと

- 日本では高齢者は IT 機器が使えないことが多いが、エストニアでは高齢者でも IT 機器の基本的な使用はできる
- いずれの学生も学業において翻訳ツールや AI ツールを日常的に活用している
- エストニアは若いうちから IT における危険性について授業で教えられるが、日本では必ず学ぶわけではない
- IT における危険性を知っていても、危険性を軽視して日常的に、安易に IT を使用することも多い

4. 発表の内容

トピック①では、エストニアと日本、ならびに両国に共通するテクノロジーの活用について整理した後、テクノロジーの活用に関する懸念点をまとめた。両国に共通することとして、翻訳ツールと AI（特に Chat GPT）の学業における活用が挙げられる。テクノロジーの活用に関する懸念点として、以下が挙げられた。

- I. EC サイト等におけるスキミング（クレジットカード情報の撮取）
- II. AI や ChatGPT の活用における情報の不正確性
- III. 人間の仕事がロボットに代替されること
- IV. インターネット上におけるデータや個人情報の抜き出し、漏洩



トピック②では、自らのデータプライバシーを向上させるための3つの宣誓を行った。

I. 同意する前に読む

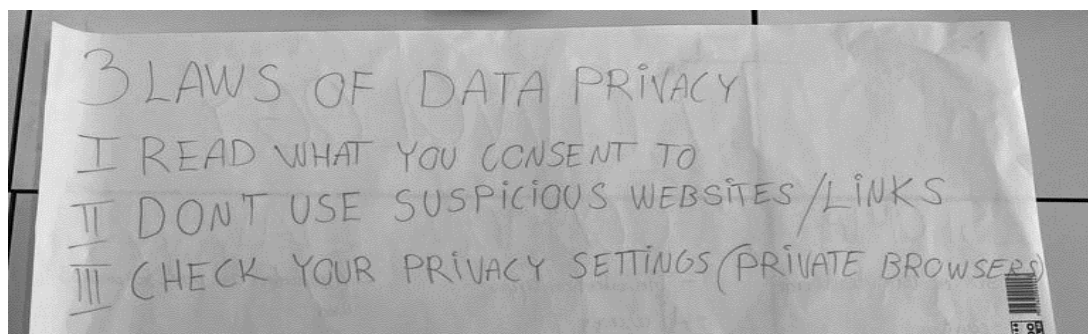
Webサイトにアクセスする際や新しいアプリでアカウントを登録する際、同意書を読まずに同意ボタンをクリックすることが多い。今後は、個人情報がどのように活用されるのかを確認し、リスクがないか検討した上で同意する。

II. 怪しいWebサイト・リンクにアクセスしない

ブラウジングをしている際に文字列や字体が通常と異なるWebサイトを見つけることや、メールやショートメッセージでスパムメールを受領することがあるが、疑わしいと思われる場合はアクセスしないことを徹底する。

III. プライバシーセッティングを確認する

SNS等におけるプライバシーセッティングが自らの意図している設定になっているか確認する。また、ブラウジングをする際や他人と共用の端末を使う際はプライベートブラウザを活用する。



<分科会ごとの感想文：グループ2>

執筆者：和田 健一朗

テーマが「IT×教育」ということで、事前学習では、日本で行われている GIGA スクール構想とエストニアで行われていたタイガーリーグの共通点や相違点など比較、検証を行った。

テーマ1に関して、私たちはテクノロジーという観点から、若者にストレスを引き起こす要因を考えた。EC サイト等におけるスキミング、AI や ChatGPT の活用における情報の不正確性、データや個人情報の抜き出し、などが意見として出た。議論する中で日本とエストニアで大きな違いを感じたことは、エストニアの高校生はスキミングや個人情報に関する理解が日本参加青年よりも深いということだ。日本では 2003 年より情報という科目が必修化され、2025 年からは、大学入試共通テストの科目にも追加されるものの、エストニアは日本より情報教育が進んでおり、参加青年が議論を引っ張る場面も多く見られた。高齢者に関しても、日本よりも遥かにネットリテラシーを有する方が多いということが分かった。その理由を尋ねたところ、あらゆる場所で高齢者向けの情報教室が開催されているからだと言われた。高齢者のコミュニティ作りとしても、高齢者向けのパソコン教室は良い案であると思ったと同時に、そんなに単純に解決できる問題なのかという疑問も残った。

テーマ2の議論では、自らのデータプライバシーを向上させるための3つの行動規範を考えた。議論を経てまとめた案は、①ウェブ上で同意書を読む、②怪しいウェブサイト、リンクにはアクセスしない、③アプリ等のプライバシーセッティングを確認するというものだ。どれも身近な内容ではあったが、案を出す際にはエストニアの高校生が議論を引っ張っていた。この理由を考えた時に、やはり前述したネットリテラシーの差と英語力の

差も感じた。高校生の一人に英語力の高さの理由を尋ねたところ、小国であるため、希望する職業に就くには英語が不可欠であるとのことだった。エストニアの高校生は、将来の職業のために積極的に言語学習をしているのかもしれない。

エストニアの高校生は、意見も多く出していたし、英語も堪能だったため、発表者がなかなか決まらなかったのは意外だった。彼らは、一般的な日本の高校生よりも高いネットリテラシーを備え、英語が堪能だったのだが、発表にはあまり前向きではなかった。ある意味、高校生らしい一面も垣間見ることもできて、とても印象に残っている。

グループ 3 の成果

テーマ 1 : What causes more stress to young people today?

グループ 3 では上記のテーマの中から、さらに「Environment」にトピックを絞ってディスカッションを行った。

1. エストニア共和国での現状

エストニア高校生の発言では、環境の中でも自然環境について言及するものが多くあった。また身近な例だけでなく、地球規模の問題に触れることも多くあった。具体的には以下のような意見が挙げられた。

- 地球温暖化はあまりストレスではない
- 海洋プラスチックの問題が頭に浮かんだ
- 動物が絶滅する環境について気になっている（特にパンダなど）
- 気温によるストレス（寒さによるストレス）はない
- 人がたくさんいる環境（都心部など）はストレスに感じる
- 自然が豊かで問題は感じない

また日本青年側から人間関係という観点でストレスはないか質問したところ、以下のような意見が挙げられた。

- 知らない友人に囲まれることがストレス
- 勉強面でのストレス（宿題が多い、試験勉強が大変）
- 先生との関係構築について悩むことがある

加えて SNS の活用で他人と比べてしまうなどのストレスはないか質問したところ、同じようなことがあるとの回答を受けた。

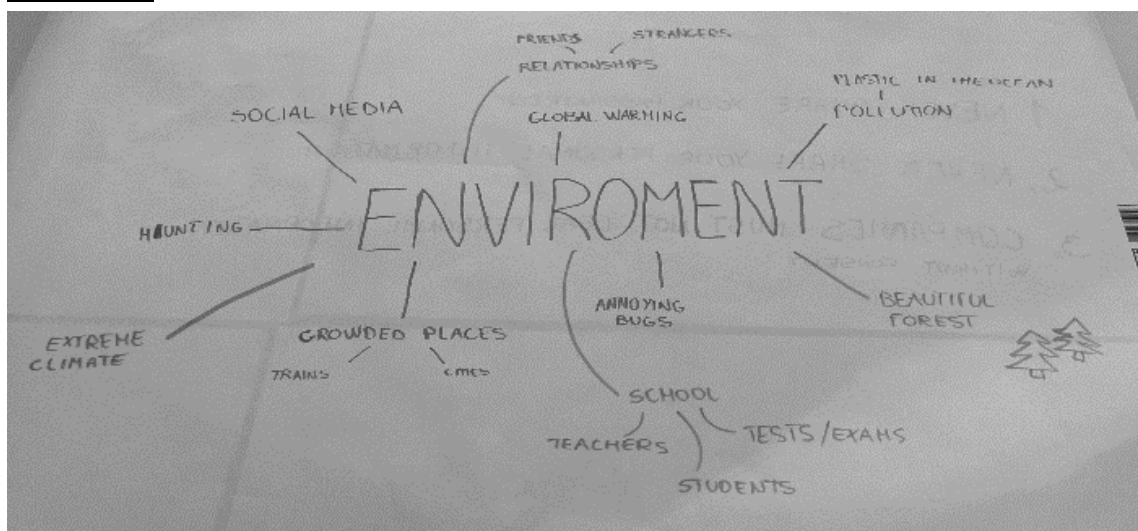
2. 日本での現状

日本青年側では自然環境のストレスとして異常気象を挙げた。夏に起こるゲリラ豪雨を例に説明した。またエストニア高校生側から地震についての質問を受け、日本では地震が日常となっており、大きなストレスではないという考えを説明した。また蝉の声が五月蠅くてストレスではないかと質問を受け、田舎に旅行に行った際に蝉の声で起こされたことなど過去の体験談を説明した。その他、人が多くいる環境として朝の通勤電車がストレスになっていると説明した。

3. 上記現状から学んだこと・気づいたこと

世界規模の環境問題を身近なストレスの例として挙げるエストニア高校生の姿から、環境問題への理解と関心の深さがうかがえた。また日本とエストニアは全く異なる自然環境を持つが、それらの環境をどう捉え生活をしているのか現地の感覚を知ることができた。

4. 発表の内容



テーマ 2 : Set 3 laws for internet data privacy

1. エストニア高校生の提案

エストニア高校生側からはインターネット利用者の視点に立った、下記の「4.発表内容」の条項 I・II についてがすぐに挙げられた。データプライバシー保護の最も基本的なこととして、これら 2つの事柄が捉えられていると感じた。

2. 日本青年の提案

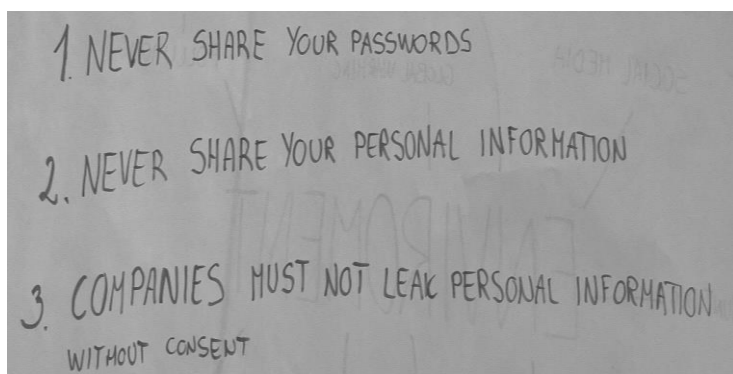
日本青年側からは条項Ⅲを提案した。法律学を学んでいる青年がいたことから、個人の視点だけでなく、見方を変えて情報を提供された企業側に注目する条項を提案した。膨大な情報を保有する企業の管理が、データプライバシーの保護に大きな影響を与えると考えた。

3. 上記現状から学んだこと・気づいたこと

両国の視点の違いから、情報を提供する側 / される側、と異なる観点から考える必要があることを学んだ。エストニアでは自身の情報について、他者が簡単にアクセスできないようにする意識が浸透していると感じられた。

4. 発表の内容

最終的に決定された 3つの条項



<分科会ごとの感想文：グループ3>

執筆者：吉田 弥生、小林 かさね

吉田 弥生

私はディスカッションの際、テーマが広すぎて苦慮した。私たちの班は環境がテーマであり、様々な要因をリストアップした。現地の高校生たちは自然環境について言及していた。気候変動や大気汚染など、広い範囲で自分たちに受けるストレスを提言していた。一方わたしたち日本人は、日本特有の満員電車での通勤や、SNSの利用によるストレスを提示した。テーマが広がったことにより、議論が抽象的なものに留まってしまったことは反省点である。しかし、現地の高校生の英語のレベルが高く、コミュニケーションに支障はなかった。エストニアの教育レベルの高さがうかがえた。現地の人によると、エストニアは小国の為仕事も少なく、英語が話せないと外に出て仕事を探ることができないから英語は必須ツールだと話していた。英語に対する価値観も日本とは異なり、様々な学びがあったディスカッションだった。

小林 かさね

一つ目のディスカッションにおいてテーマとして「環境」が与えられた際、私自身は人間関係や家庭環境に関する項目が浮かんだ。一方でエストニア青年側は開始してすぐに自然環境について触れただけでなく、地球規模の問題についての発言が多くあった。これらのことを通じてエストニア青年の自然への愛を強く感じ驚いた。加えて、エストニア青年の1人が「自然豊かで環境について問題に感じたことはない」と話したことを受けて、サーレマー島の高校生が自国の自然を誇りに思っていることが伝わってきた。また2つ目のディスカッションではエストニア青年と日本青年のトピックへの捉え方に大きな違いがあったように感じた。エストニア青年側では「自身がインターネットを使用する際にどうしたら良いか」という観点からテーマを捉えているのに対して、日本青年側では「インターネットに関連するステークホルダーを総合的に考える」という着目点の違いがあったように感じられた。ディスカッション全体を通じて、エストニア青年が高校生であったこともあり、大学で同世代とディスカッションをする際とは異なる緊張感があった。考えや背景が異なる人と意見を交わすことの奥深さを実感できたディスカッションであった。

グループ4の成果

テーマ1：What causes more stress to young people today?

1. エストニア共和国での現状

ソ連に併合されていた過去やロシアと国境を接していることにより、エストニア人はロシアとウクライナの問題を注視している。また、エストニアは NATO に属しているが、もしロシアがエストニアに侵攻した場合に、NATO や他国からの支援を得られるのかということに関しても気にしている。先日のパレスチナ問題に関しても、戦争が身近に起きている現状から、敏感に反応せざるを得ない。

2. 日本での現状

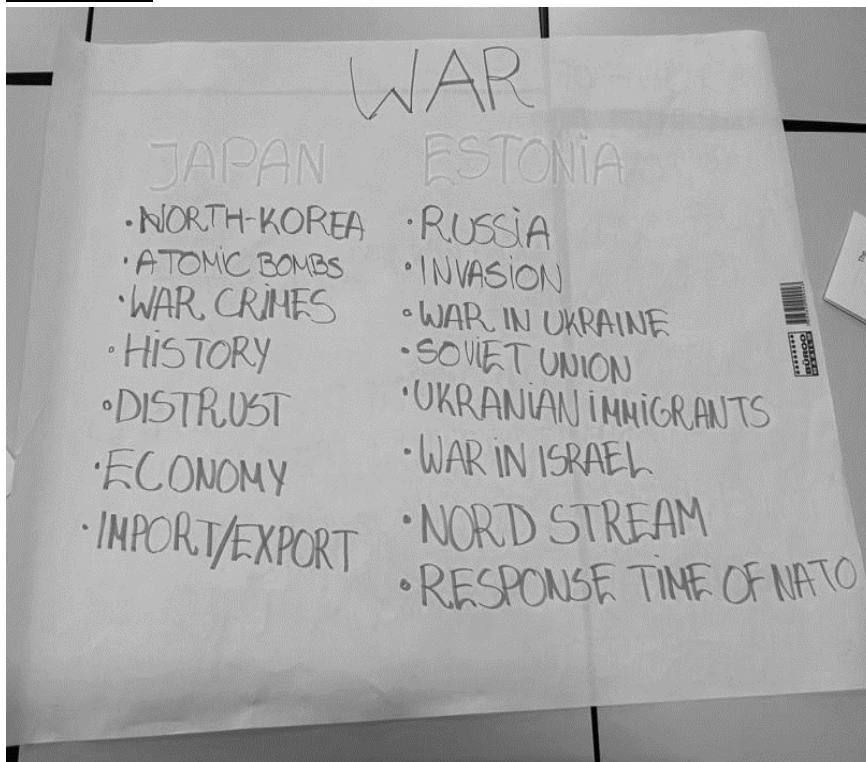
第二次世界大戦など戦争についての学習を小学生の頃に行うため、戦争の悲劇的な歴史について学ぶことが、子どもに恐怖感を与えることがある。

ロシアによるウクライナ侵略によって、日本では輸出入に大きな影響が出ている。電気代の高騰や、その他ロシアに関する物品の多くの値段が高騰し、家計に大きく影響を与えている。

3. 上記現状から学んだこと・気づいたこと

日本と比較して、エストニアは戦争が身近な地域で起きていることや、侵略の歴史から、近年の戦争について非常に敏感である。そのような点で、小学生の頃から戦争について教育されている日本人よりも、戦争をテーマとした洞察に優れていると感じた。

4. 発表の内容



テーマ 2 : Internet data privacy

1. エストニア共和国での現状

IT 先進国としていろいろな行政サービスがデジタル化されているエストニアにおいても、国民の IT リテラシーは極めて高いわけではない。例えば、何かのサイトにログインする際に管理規約が出てきたとしてもよく読まずに進んでしまったり、複数のサイトのパスワードを同じものにしてしまったり、あるいは違うものにしたとしても他人から安易に見られてしまうような場所に保管してしまったりしている。

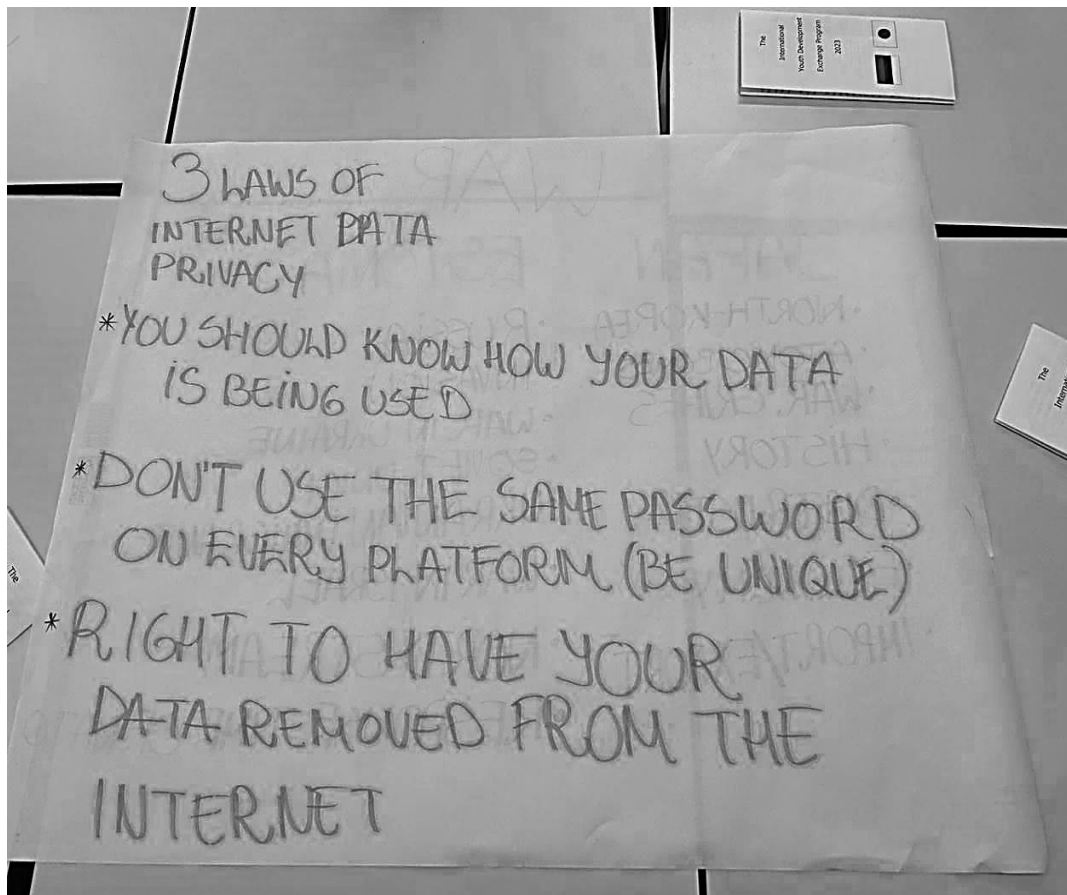
2. 日本での現状

日本では徐々に行政民間含めたサービスがデジタル化されている状況であり、世代間の IT リテラシーのギャップが問題となっている。また、エストニアと同じように、人々のインターネットプライバシーに関する意識は低いと感じる。

3. 上記現状から学んだこと・気づいたこと

日本よりもはるかにデジタルサービスが普及しているエストニアにおいても一般の人々の意識は想定していたよりも高くなく、日本と大差ないことに驚いた。両国において一般の人々がインターネットプライバシーの重要性を理解できるような施策が必要である。

4. 発表の内容



<分科会ごとの感想文：グループ4>

執筆者：青木 待心、山下 ころろ

青木 待心

1つ目の戦争に関するトピックでは、現状のロシア・ウクライナ問題や過去にエストニアがソ連によって侵略されていた歴史から、話しづらいテーマであると最初は感じていた。しかしエストニアの高校生が自らソ連やロシアの問題について話しており、私が思っているよりも、エストニア人は冷静に現状を考えていることが印象深かった。また、エストニア国内には一定数ロシア人が住んでいる現状や、世代や信条によって、考えが変わるという点は、非常に印象的だった。2つ目のデータプライバシーに関するトピックでは、エストニアでは行政が個人情報を取り扱う際に、アクセスログが残ることや、個人情報へのアクセスに際し、様々な認証が必要になることから、日本の高校生と比較して、データプライバシーへの考え方の違いが気になっていた。しかし、ディスカッションを通して、日本の高校生と大きく差は無く、パスワードを使い回さないことやインターネット上での自身の情報の取り扱いなど、身近なセキュリティ対策の重要性も理解しており、行政や大きな組織によるセキュリティ対策が有名なエストニアではあるが、個人レベルでのセキュリティリテラシーの高さを実感した。

山下 ころろ

1つ目のトピックは戦争がどのように若者のストレスとなっているかについてであり、日本とエストニア両方でセンシティブな話題であった。ロシアとウクライナの問題についてエストニアの若者がどのように考えているのかに渡航前から関心があったが、実際に意見を聞いてみるとどちら側にも寄っていないフラットな意見が多いと感じた。また、物価の高騰や移民の流入など起こっていることを冷静に受け止めているという印象を受けた。

2つ目のトピックはデジタルサービスを利用する際に情報セキュリティの観点から守るべきルール3つを制定するというものであった。こちらでは出てきた意見がエストニアと日本に共通することであり、IT先進国であるエストニアでも日本と同じくらいの危機感でネットを使っているのだと分かり、どちらの国においても情報リテラシーを高めていく必要があると感じた。

2. 10月12日開催分

場所	ユーフィー市、kood/Jõhvi(インターナショナルコーティングスクール)
テーマ	1. Share successful IT initiatives or projects from their respective countries- each idea/story to one sticky note. Then try to combine and find similarities in teams, categorize them. 2. Find problems that your country has regarding to IT solutions
参加者	日本参加青年 10 名、エストニア青年 9 名、通訳 2 名
スケジュール	10:15-11:30 施設見学・日本文化紹介 11:30-11:45 Speed-meeting 11:45-11:50 I exercise 11:50-12:05 II exercise 12:05-12:20 III exercise 12:20-12:30 conclusions 12:30-13:30 昼食 13:30-14:30 コーディング体験

<分科会ごとの成果> グループ 1 から 4 に分かれて分科会を実施

テーマ	1. Share successful IT initiatives or projects from their respective countries- each idea/story to one sticky note. Then try to combine and find similarities in teams, categorize them. 2. Find problems that your country has regarding to IT solutions
トピック	日本とエストニアの IT 事業及び連携可能性について
参加者	日本参加青年 3 名、エストニア青年 3 名

グループ1の成果

1. エストニア共和国での現状

エストニアで成功したIT事例として、Suicaのような機能をもつグリーンカードやSMART-ID、e-Voting、e-Health、オンラインでのチケット購入やエストニア発祥企業のBOLTやSOLARIDE、Skypeなどが挙げられた。また教育ではエストニアの全学校にPCを設置するタイガーリープ制度や無料コーディングスクール（このディスカッションを実施したkood/Jõhvi）などが挙げられた（写真1）。挙げられた事例のうち、ほとんどのものを交通機関、IDカード、健康・医療、教育、社会システム、地方自治体のカテゴリーに分類することができた（写真2）。その一方で、ITが発展したことによる課題として、高齢者のIT抵抗やサイバーセキュリティへの懸念、新しいシステムに市民の理解が追い付いていない点などが挙げられた。

2. 日本での現状

日本で成功したIT事例としてもエストニア同様に、交通機関、IDカード、健康・医療、教育、社会システム、地方自治体のカテゴリーに分類することができた（写真2）。交通機関ではドローンデリバリー、IDカードでは企業入館証、健康・医療では電子タブレットや官民連携、教育ではプログラミング大会やGIGAスクール構想、社会システムではSociety5.0、地方自治体ではデジタル市民などが挙げられた。ITが発展したことによる課題としてもエストニアと同様に、デジタルデバインドやIT教育が十分でないことが挙げられた。

3. エストニアのITと日本のITでコラボレーションできること

地方を盛り上げる施策として、エストニアのe-residencyを日本にも取り入れるのはどうか、日本のIT技術者不足に対して、モチベーションアップのために楽しく学べる場所を提供するのはどうかという点が挙げられた。また、エストニアでも、ITに対して新しい教育を取り入れてみたいという点があげられた。

4. 上記現状から学んだこと・気づいたこと

電子政府ランキングで常に上位に位置するエストニアでは、IT人材を確保する取り組みとしてIT教育に力を入れていることが分かった。日本ではリカレント教育がまだ主流ではなく、大学への再入学や民間スクールなどに通うと高額な費用を捻出する必要がある。今後、IT国家として飛躍することを目指すのであれば、エストニアのような無料でITについて学べる仕組みを整えるべきだと考える。その一方でデジタルデバインドや複雑なユーザーインターフェースなど、日本で抱えている課題はエストニアでも同様に存在することも判明した。自主研修期間では、エストニアはIT国家として最先端と学んでいたが、このディスカッションを通じ、生の声を聞くことで世界共通の課題であることを改めて実感した。

5. 発表の内容



写真1：カテゴリ化前

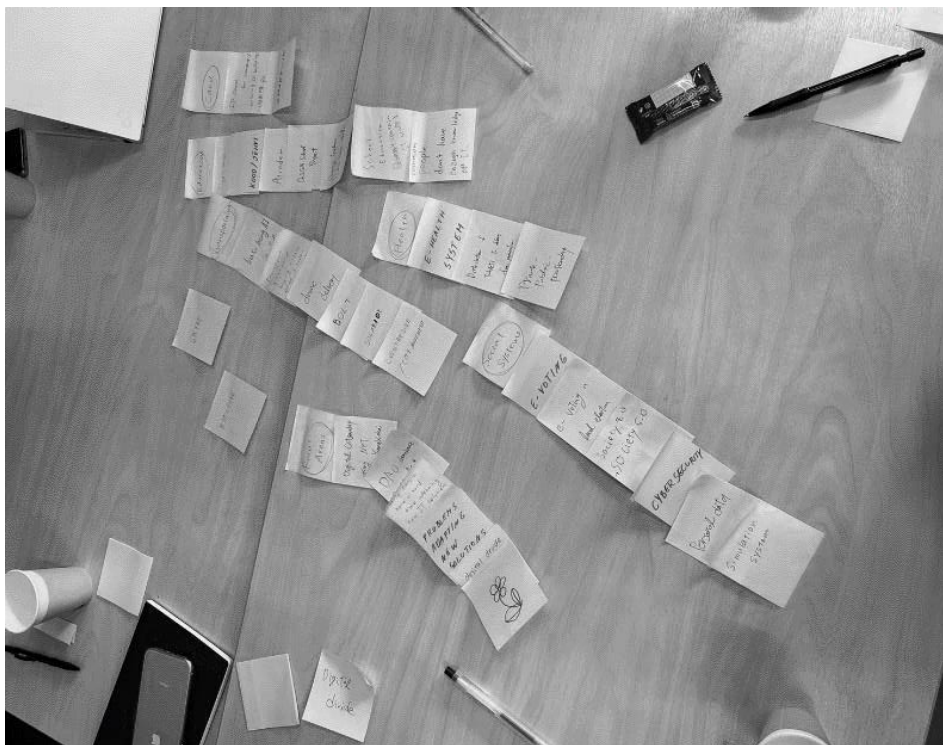


写真2：カテゴリ化後

<分科会ごとの感想文：グループ1>

執筆者：吉良 慶信

本ディスカッションに臨むにあたり、我々のグループはエストニア青年に紹介したい日本でのITを用いたプロジェクトを調べた。私は関心分野である行政やまちづくりにおけるIT活用に焦点を当て、準備を行った。また、日本におけるIT活用の促進を妨げている要因についても事前に調査を行った。そして、当日のグループディスカッションを迎えた。エストニア青年とのディスカッションでは、双方の国で実施されているITを活用したプロジェクトと、IT活用にまつわる課題について詳細に説明し、日本とエストニアが協力できる潜在的な分野について意見交換を行った。

このディスカッションにおいて、一つの重要な洞察が得られた。それは、日本の自己評価が過度に控えめである可能性があるということだ。確かに、エストニアと比較すると、日本はIT活用において遅れている側面があるかもしれない。しかし、日本は特定の分野においては高度な成果を上げており、我々が調査したプロジェクトを紹介すると、エストニアの青年たちは驚きを表し、特にWeb3.0の分野において日本が先進的であることを認識できた。エストニアの代表たちとの対話を通じて、日本のIT活用を過小評価していたことに気づくことができたのだ。

さらに、エストニアの青年からエストニアにおけるIT活用にまつわる課題について詳細を聞く機会があり、日本とエストニアが共通の課題を抱えている可能性に気付くこともできた。これまで、日本とエストニアは似つかない国であるという印象を抱いていたが、人口減少社会への対応、デジタルデバイド、IT人材不足など、両国が共通の課題に直面していることが明らかになり、双方の親近感が高まったように感じる。

このディスカッションを通じて、日本とエストニアのIT活用に関する新たな洞察と協力の可能性について感じることができた。将来、エストニアの青年と協力できる日が来るのではないかと心の底から期待している。

グループ 2 の成果

テーマ 1 :Share successful IT initiatives or projects from their respective countries- each idea/story to one sticky note. Then try to combine and find similarities in teams, categorize them.

1. エストニア共和国での現状

- ウクライナでは、エストニアの e-ID と同様に政府が提供している電子認証アプリサービスが利用されている。ウクライナの銀行口座、パスポート、免許証で認証が可能。スピード違反等の違約金もこのアプリ経由で請求される。またオンラインバンキングシステムも一般的である。
- エストニアでは、オンラインのチケット予約システムでチケット購入のために駅に行く必要がない。

2. 日本での現状

- 海運業界では、AI を用いた取り組みが多く行われている。オペレーター目線では細かい計算が必要なくなったり、日付と港名を入力すれば、最適な配送ルートも計算される。
- 日本の公共交通機関では、非接触決済が一般的になっている。
- ビジネス現場では、画像認識による帳票の読み取りも進んでいる。
- AI を用いたロジスティクス領域でのルート最適化も進んでいる。

3. 上記現状から学んだこと・気づいたこと

- 参加者の一人はウクライナ出身の学生であったが、ウクライナでもエストニアと同様に行政サービスの電子化が進んでいる。
- IT サービスの活用例について考えると、ウクライナやエストニアでは行政サービスやエッセンシャルなサービスにおける IT 活用が多く、それに対して日本ではプライベートセクターでの IT 活用例が多かった。

4. 発表の内容は後続のテーマ 2 にて記載

テーマ 2 :Find problems that your country has regarding to IT solutions

1. エストニア共和国での現状

- IT 関連の仕事では眠気との戦いになることもあり、カフェインが手離せない状況もある。
- 高齢者は既存の自分たちが心地よいプロセス（紙でのプロセス）にこだわりがちである。
- 高齢者は時間があり、寂しさを感じると交流できる場に行くと思うので、そこで IT に明るい若者がデバイスの使い方を説明するような場があるといいかもしれない。

2. 日本での現状

- 情報格差が問題。高齢者や IT になれていない方をどう巻き込むかも課題。
- 高齢者向けにはシンプルなスマホも提供されている。

3. 上記現状から学んだこと・気づいたこと

- 問題をどのように解決していくのかという話になった時に、システムを使うユーザー目線でどのような形が使いやすいのかという UI の話が非常に盛り上がった。日本では、良い商品があれば売れるといったようなプロダクトアウトな考え方が多いが、エストニアやウクライナではユーザーに着目してサービス開発する姿勢が比較的一般的なのかもしれないと感じた。
- 上記の一方で、高齢者向けの IT サービスはエストニアにはないとのことで、高齢化社会が進んでいる日本だからこそそのサービスも生まれているということを再認識した。

4. 発表の内容



<分科会ごとの感想文：グループ2>

執筆者：富田 陽介

本プログラムでのディスカッションに向けて自らが関心のある交通システム、教育を中心にリサーチを進めてきた。事前学習の段階では、日本の根本的な構造として新技術への導入に慎重な姿勢が見られることが分かった。具体的な事例でいえば、web2.0 初期のインターネットに関する規制や web3.0 に関連する仮想通貨やその税制についてである。個人的に関心のある交通システムについては、Suica や Pasma といった非接触型決済が 2000 年代に普及して以降、進展が見られないことが挙げられた。また教育については、GIGA スクール構想でタブレット型端末が配布されたものの、その利用機会が教員の IT リテラシーに委ねられている点が課題として挙げられた。

ディスカッションでは、双方の IT 技術の共有や話し合いから 2 つの気づきを得られたと感じている。1 点目は、両国で IT 技術が活用される分野が異なることが明らかになった。日本では民間企業での使用が主流であるのに対し、エストニアでは公共部門のデジタル化が進んでいる。この違いは、歴史的背景に根ざしていると考えられる。特にエストニアは、独立初期に資源が限られており、人材の効率的な活用を通じて国の発展を目指してきた。また、長期にわたる占領の影響で、国民の間に階層意識が希薄であるため、官民の区別なく良質なサービスの提供が可能になったと推測される。

2 点目は、エストニアが電子国家として知られているにもかかわらず、高齢者問題において日本と大きな違いがないことである。両国とも高齢者にとっては紙の方が IT 機器よりも扱いやすいとされている。

また、高齢者への IT 教育の機会も限られている。日本では、高齢者向けのスマートフォンなど

が提供されており、高齢化社会への対応としてこれらのサービスが重要であることが認識された。

全体を通して、エストニアのデジタル化推進基準を深く理解することができた。事前の学習では、すべてのシステムがデジタル化されていると考えられがちだが、実際には離婚などの重要な書類や紙の方が効果的である部分も残されていることがわかった。これにより、日本の政策立案においても、紙と電子版の効果を慎重に検討し、デジタル化を進める必要性を認識した。

グループ3の成果

テーマ1: Share successful IT initiatives or projects from their respective countries- each idea/story to one sticky note. Then try to combine and find similarities in teams, categorize them.

1. エストニア共和国での現状

行政の様々な文書は基本的にデータで保存されている。その他にも医療サービスは電子化されており、大学・大学入試にかかるプロセスはオンライン上で可能である。e-Residency(エストニアの電子居住権)を取得することで、海外の人でも様々な行政サービスを受けることが出来る。(口座の統合など)

2. 日本での現状

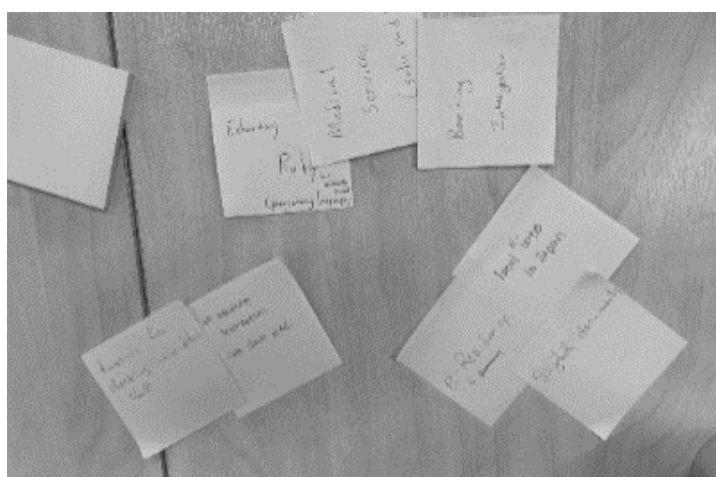
コンピュータサイエンス専攻以外の学生でも、プログラミング学習が出来るカリキュラムなどがある。また在籍している大学では、様々なデータをオンライン上で閲覧・やりとり出来る。その他、地方選挙においては、オンライン投票の実現を目指している地方自治体があり、既に実証実験なども行っている。

3. 上記現状から学んだこと・気づいたこと

書類の電子化という点では、日本とエストニアでは共通して取り組んでいるが、X-Road や電子カルテの共有などの点で、エストニアの方がよりデジタルを用いた効率化が進んでいることを実感した。エストニアと日本では比較して、X-Road のような共通基盤の有無と、その共通基盤と他のデータベースの連携が大きく違いを生んでいると感じた。現状、日本ではマイナンバーの個人番号と紐づけられているものはまだまだ限られており、システムの自由度という観点で、エストニアから学ぶことが多くあった。

4. 発表の内容

- Educating
- Medical Services
- Banking Integration
- Checking universities staff
- All University Information can check site
- e-Residency
- Local e-vote in Japan
- Digital documents



テーマ 2 :Find problems that your country has regarding to IT solutions

1. エストニア共和国での現状

※コーディングスクールの学生にはエストニア以外の方も在籍していたためエストニア以外の内容も含む

急速な都市化により、都市部と地方の間での経済的な格差が広がっている。また人口にも大きく差が出ており、地方の孤立化と都市部への人口の流出が進んでいる。そして地方には職業選択の自由や様々な機会が少ない。

2. 日本での現状

サーバー障害やハッキングによるデータ漏えいなどのリスクから、IT に対する信頼性が低い。ほぼ全ての情報がインターネットによって世界中と繋がっていることから、個人情報保護に対して懐疑的である。そして高齢者を中心に、IT の利用に対して苦手意識を持っていたり、困難さを感じている現状がある。また地方と都会では、情報格差や機会格差がある。その他、災害発生後の支援においては、情報共有が遅いことや信頼性が低いことがある。

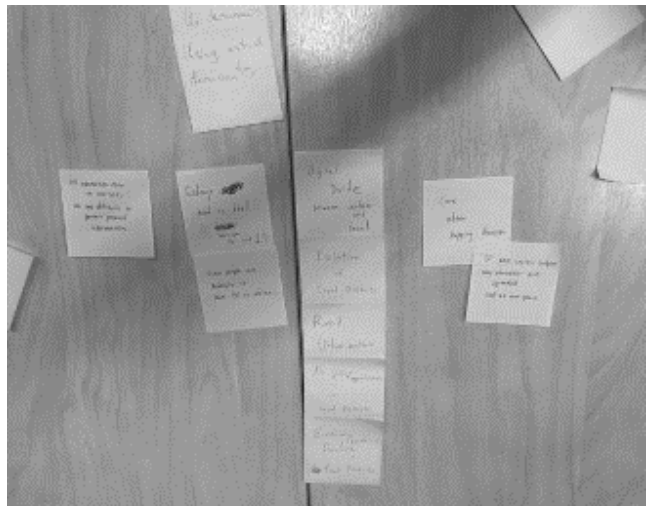
3. 上記現状から学んだこと・気づいたこと

日本と同様に、都市部と地方の間で様々な格差が生じていることを感じた。また、その一方でエストニアの X-Road が都市化によって生じる問題を解決へ繋げる一躍を担っていることが分かった。具体的には、様々なデータが X-Road によって結び付けられていることによって、地方部特有の遠くの役所まで、足を運ぶ手間を省くことができることである。

自宅の PC から様々なデータにアクセスできることで、地方に住んでいながらも、都市部と変わらない行政サービスを受けることが出来る点は、非常に魅力的な点であるといえる。

4. 発表の内容

- Digital Divide between urban and local
- Rapid urbanization



<分科会ごとの感想文：グループ3>

執筆者：青木 待心、吉田 弥生

青木 待心

テーマ1の各国のITの現状に関しては、やはりエストニアが日本よりも格段に進んでいた。エストニアでは行政サービスの99%がインターネット上で行える。行政文書は基本的にデータで保存されていて、いつでも閲覧でき、政府の透明性が確保されている。一方日本では行政のIT化は進んではいないものの、小学校でプログラミングの授業が導入されたり、大学の成績など個人情報がオンライン上で閲覧できる。民間のITを活用する場面が多いように感じた。エストニアでは情報技術の導入が政府主導なのに対し、日本では民間が主導していると考えた。日本でもゲームやアプリなどの開発が盛んであり、一概に遅れているとは言えない。ただその利用場面が異なるのみであるように感じた。エストニアはソ連から独立したという歴史的背景を持ち、小国がゆえになにか強みを生み出す必要が生じた。だから政府が先導しIT化が進んだのだと考える。

吉田 弥生

議論の中で、日本とエストニアの大きな差はX-Roadのような基盤の有無だという内容になった。確かに日本もマイナンバーカードの導入やカルテの電子化などエストニアと同じシステムを持つが、その情報は個々で独立していて流動性がない。全てを統合する情報基盤を作れば、より利便性が向上すると考える。

テーマ2について、ITの発展による課題は両国ともに地方と都市の格差があげられた。機会の不平等や都市に技術や人材が集中することにより地方の過疎化が進む。しかしITはその性質上どこでも利用することができる。地方でも活用することが可能だ。現状ある問題を解決するために、両国で検討していきたいと思う。

グループ4の成果

テーマ1: Share successful IT initiatives or projects from their respective countries- each idea/story to one sticky note. Then try to combine and find similarities in teams, categorize them.

1. エストニア共和国での現状

エストニア青年側からは主に行政サービスの成功例について多くの意見が挙がった。具体的には以下のサービスがあった。

- E-voting : 電子投票を可能にする
- Smart ID/Digi ID : 本人確認を行う仕組み
- M-riik : 利用者の携帯電話に身分証明書を入れることができる
- M-parking : 駐車料金をオンラインで支払うことができる
- Taxes online : 電子納税申告を可能にする

また、E-voting に関しては安全性が問題になっていると、良い点だけでなく問題点にも言及していた。

2. 日本での現状

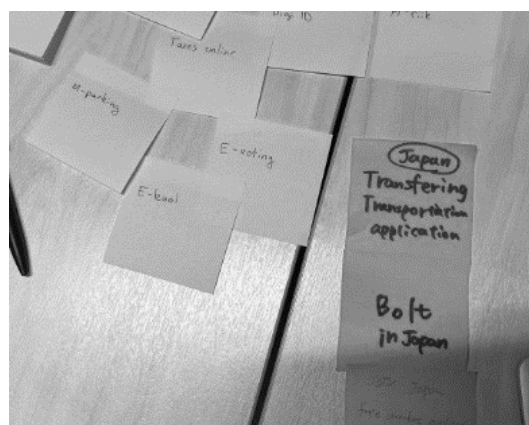
日本青年側からは有名な民間サービスについて紹介をした。電動キックボードシェアサービスの日本での広がりや、フリーマーケットアプリについて説明をした。また公共交通機関が発達した日本では「乗り換えアプリ」があり、日常的に使用されることを紹介した。

3. 上記現状から学んだこと・気づいたこと

事前学習期間にエストニアの行政サービスの多くが電子化されていることを学んだが、それらのサービスが「成功例」として好意的に受け入れられていることを実際に感じる事ができた。また日本の乗り換えアプリについて紹介をした際は、エストニア青年側から「エストニアではアプリを必要とするほど公共交通機関が発達していない」という意見を受け、代表的なITサービスから国の文化の違いを感じる事ができた。

4. 発表の内容

- X road
- Taxes online
- M-Parking
- Smart ID/Digi ID
- M-riik
- E-kool
- E-Voting
- Japan/Transferring transportation application



- Bolt in Japan
- Free market application

テーマ2 :Find problems that your country has regarding to IT solutions

1. エストニアでの現状

エストニア青年たちは「問題点が思いつかない」と考えることに苦労していた。エストニアにおける高齢者の IT 活用について質問をしたところ、高齢者世代では有名なサービスでも利用していない場合があると説明を受けた。またエストニアのマイナンバーカードについて「エストニアは国が小さいから受け入れられた」と言及していた。

2. 日本での現状

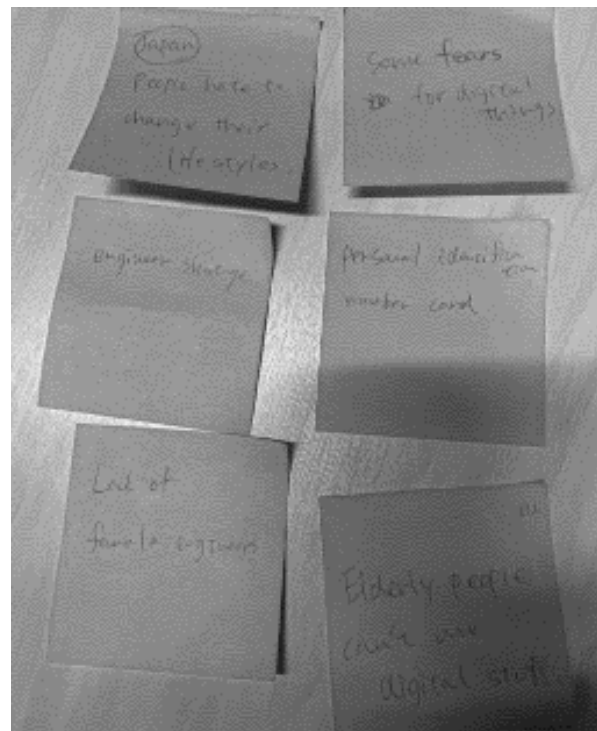
まず始めに日本青年側からは、高齢者が IT の安全性に疑問を持っておりデジタル化が受け入れられないことを問題点として挙げた。またエストニア青年側から「若い人の IT 化に対する意見はどうか」という質問を受け、個人的には賛成していることも多いが、組織的な改革をしようと思うと受け入れられないことが多いという現状を説明した。

3. 上記現状から学んだこと・気づいたこと

エストニア青年のマイナンバーカードの説明から、国の特性と IT サービスの普及について、深い理解があることがうかがえた。

4. 発表の内容

- People hate to change their lifestyle
- Engineer shortage
- Lack of female engineers
- Some fears for digital things
- Personal identification number card
- Elderly people can't use digital stuff



<分科会ごとの感想文：グループ4>

執筆者：山下 ころ、小林 かさね

山下 ころ

ここでのディスカッションでは、エストニア青年と一緒に日本とエストニア両国のデジタルツールの活用や人々のそれに対する適応などを話し合い、エストニアの若い人たちがデジタル国家についてどのように考えているのかを知る良い機会となった。日本よりもはるかに公共サービスにおいてデジタル化が進んでいるエストニアにおいても、日本と同じように人々のデータセキュリティの意識の低さが問題になっていることを知り、少し意外に思ったと同時に、日本においてもサービスの拡充とともに人々の意識の向上も同時に行っていかなければいけないと感じた。

また、一緒に議論をしたエストニア青年の母国に対する知識の深さと関心の高さに驚いた。自分の国で施行されている政策の内容だけでなく、その背景にはどのような歴史や文化があるのかまで説明してくれて、自分は日本についてここまで深く話すことはできないと思い、母国に対する意識を見直すきっかけともなった。

小林 かさね

今回のディスカッションでは事前学習期間に調べたエストニアの電子行政サービスについて、実際に生活で活用しているエストニア人がどのような思いを抱いているのかを知る貴重な機会となった。事前学習期間では派遣団の仲間と参考になる書籍や文献を紹介し合い、代表的な行政サービスや日常生活での使われ方について知識を得た。

それらの知識が今回のディスカッションを通じて一層厚みを増した。実際にエストニア青年から「便利」という言葉を聞いたり、また反対に成功例として紹介されることが多いシステムでも安全性で問題になることもある現実を聞き、行政サービスの電子化が人々の生活に大きな影響を持つことを実感できた。また今年度できたばかりのサービスにおいても詳しく知っているエストニア青年の姿から、電子サービスへの期待値の高さや関心の大きさを実感した。これまでのたくさんのサービスの成功が積み重なり、新しいシステムを受容する文化がつくられていると感じた。

また、ディスカッションの中で互いの国でだけ発展している IT サービスがあり、国の特性や文化など IT サービスが普及した背景について考えることの重要性を実感した。